

金ロイオン聖体礼儀（輔祭なし）

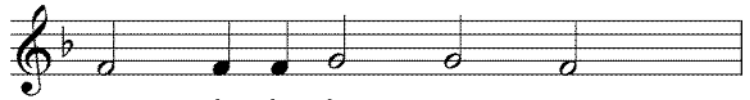
【 重聯禱 】

司祭) われらみなたましい まつと い われら おもい まつと い  
我等皆 靈 を全 うして曰わん、我等の 思 を全 うして曰わん、



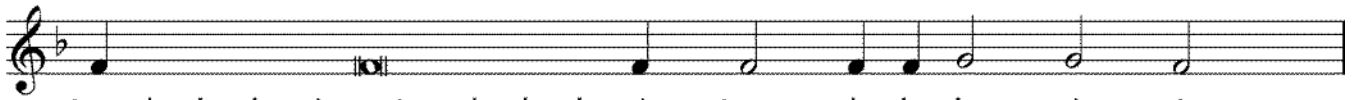
しゅあわれ めよ。  
主 憐

司祭) しゅぜんのうしゃ わ れつそ かみ なんぢ いの き い あわれ  
主全能者、吾が列祖の神よ、爾に禱る聆き納れて憐めよ、



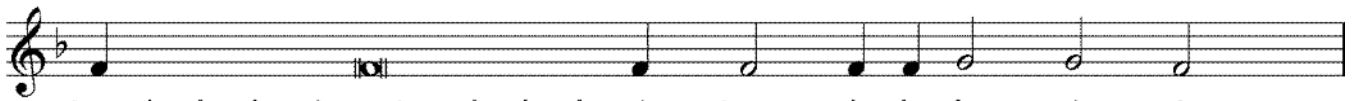
しゅ あわれ めよ。  
主 憐

司祭) かみ なんぢ おおい あわれみ よ われら あわれ なんぢ いの き い あわれ  
神よ、爾の大なる 憐に因りて我等を 憐めよ、爾に禱る、聆き納れて 憐めよ、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ めよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

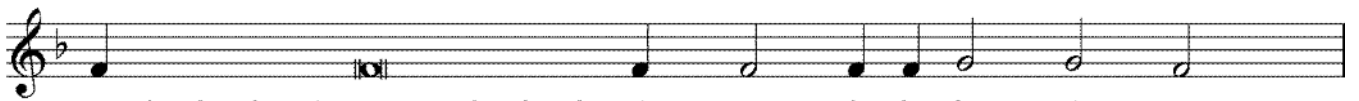
司祭) またわ く に てんのうおよ く に つかさど もの ため いの  
又我が國の天皇及び國を 司る者の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ めよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またきょうかい つかさど そんき われら ぜんにつぼん ふしゅきょう およ  
又 教會を 司る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィム、及びハリストスに

お ことごと われら けいてい ため いの  
於ける 悉くの我等の兄弟の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ めよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またわれら けいてい しよしさい しよしゅうどうしさい およ お われら しゅうけいてい  
又我等の兄弟、諸司祭、諸修道司祭、及びハリストスに於ける我等の衆兄弟

ため いの  
の爲に禱る、

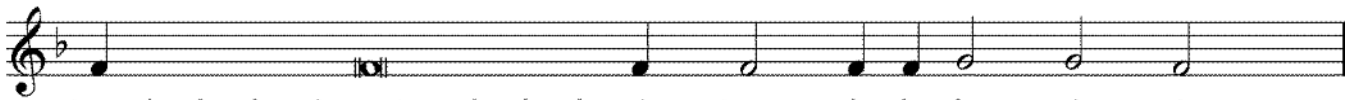


しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ めよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またつね きおく ふく しせい せいきょう パトリアルフ せいどう こんりゅうしゃ およ  
又恒に記憶せらるる、福たる至聖なる正教の総主教、この聖堂の建立者、及

すで ねむ ことごと ふそけいてい こ ところ しよほう ほうむ せいきょう もの ため  
び已に寝りし 悉くの父祖兄弟、此の處と諸方とに葬られたる正教の者の爲

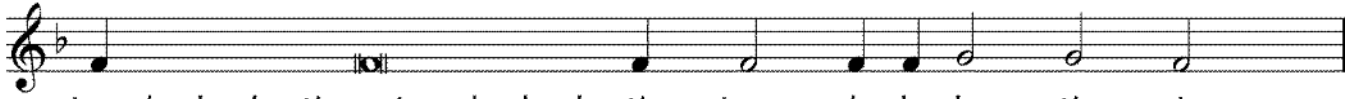
いの  
に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またこの至尊なる聖堂に物を献り、善業を行い、之に勞し、之に歌い、及び

ここに立ちて爾の大にして豊なる憐を仰ぎ望む者の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

( ※ 特別な災害や特別な感謝がある時、重聯禱にその旨追加する場合がある。その場合も「主憐め、主憐め、主憐めよ。」と応えて歌う。 )

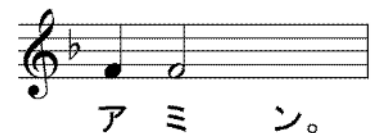
司祭) ( 黙誦：主我が神よ、爾の諸僕より此の熱切の祈禱を受け、爾が憐の多きに

よわれらあわれ、爾の恵を我等と凡そ爾の豊なる憐を仰ぐ

爾の民に遣し給え、 )

司祭) 蓋爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今

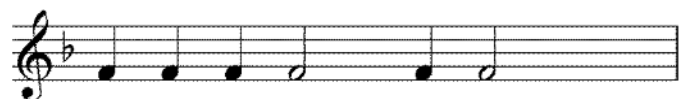
も何時も世に、



ア ミ ン。

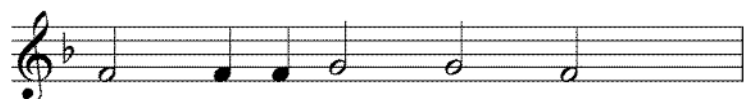
### 【 啓蒙者の聯禱 】

司祭) 啓蒙者よ、主に禱るべし、



しゅあわれめよ。  
主 憐

司祭) 信者よ、啓蒙者の爲に禱らん、願くは主は彼等に憐を垂れん、

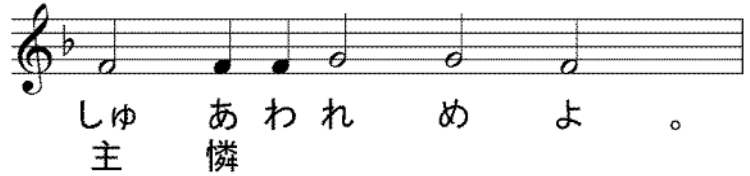


しゅあわれめよ。  
主 憐

しんじつ ことば もつ かれら けいもう  
司祭) 眞實の言を以て彼等を啓蒙せん、



ぎ ふくいんけい かれら ひら  
司祭) 義の福音經を彼等に啓かん、



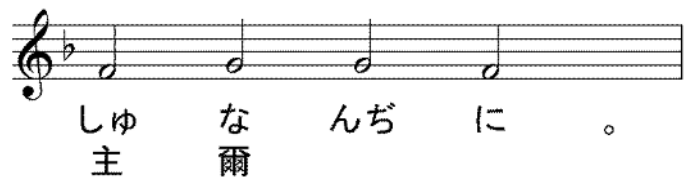
かれら そのせい こう した きょうかい いつ  
司祭) 彼等を其聖・公・使徒の教會に一にせん、



かみ なんぢ おんちよう もつ かれら すく あわれ たす まも  
司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、彼等を救い憐み佑け護れよ、



けいもうしゃ なんぢら こうべ しゅ かが  
司祭) 啓蒙者よ、爾等の首を主に屈めよ、



司祭) ( 黙誦：主我が神、高きに居り卑きを臨み、爾の獨生子・神・我が主イイスハ

リストスを遣して人間の救となしし者よ、爾の僕・啓蒙者・其首を

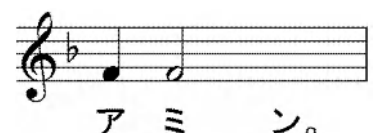
爾に屈めし者を顧み、時に随いて、彼等に復生の浴盤、諸罪の赦、

不朽の衣を賜い、彼等を爾が聖・公・使徒の教會に一にし、彼等を爾

の選ばれたる群に合せ給え、 )

司祭) 願くは彼等も我等と偕に、爾父と子と聖神の至尊至榮の名を讃揚せん、今も何

つ よよ  
時も世世に、

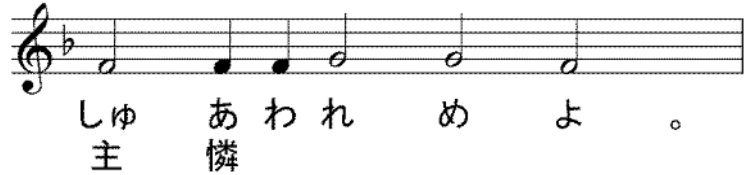


【 信者の聯禱 1 】

司祭) <sup>しゅうけいもうしゃい</sup>衆 <sup>けいもうしゃい</sup>啓蒙者出でよ、<sup>しゅうけいもうしゃい</sup>啓蒙者出でよ、<sup>けいもうしゃひとり</sup>衆啓蒙者出でよ、<sup>ただしん</sup>啓蒙者一人もなく、唯信  
<sup>じゃまたまたあんわ</sup>者復又安和にして<sup>しゅ いの</sup>主に禱らん、



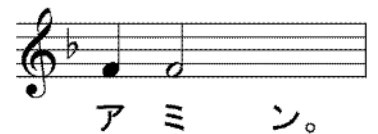
司祭) <sup>かみ</sup>神よ、<sup>なんぢ おんちよう もつ</sup>爾の恩寵を以て、<sup>われら たす すく あわれ まも</sup>我等を助け救い憐み護れよ、



司祭) <sup>えいち</sup>睿智、

司祭) ( 黙誦：<sup>しゅ ばんぐん かみ なんぢ われら いま なんぢ せい さいだん まえ た なんぢ</sup>主、萬軍の神や、爾が我等に、今も爾の聖なる祭壇の前に立ち、爾  
<sup>じれん ふふく われら つみ しゅうじん あやまち ため きとう ゆる たま</sup>の慈憐に俯伏し、我等の罪と衆人の過との爲に祈禱するを赦し給いし  
<sup>なんぢ かんしゃ かみ われら いのり い われら なんぢ しゅうじん ため なんぢ</sup>を爾に感謝す、神よ、我等の禱を納れ、我等を爾が衆人の爲に、爾  
<sup>いのり ねがい むけつ まつり けん た もの たま われらなんぢ せい</sup>に祈と願と無血の祭とを獻ずるに勝る者となし給え、我等爾が聖  
<sup>しん ちから こ なんぢ ほうじ ため た もの ていざい つまづき そのりょう</sup>神の力にて此の爾の奉事の爲に立てし者を、定罪なく、躓なく、其良  
<sup>しん いさぎよ しょう もつ いづれ ときいづれ ところ なんぢ よ かな もの</sup>心の潔き證を以て、何の時何の處にも爾を籲ぶに適う者となし  
<sup>なんぢわれら き なんぢ あいれん おお よ われら ため じんじ もの</sup>て、爾我等に聴き、爾が哀憐の多きに依りて、我等の爲に仁慈の者とな  
<sup>いた</sup>るを致せ、 )

司祭) <sup>けだしおよ こうえいそんきふくはい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ</sup>蓋凡そ光榮尊貴伏拜は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、



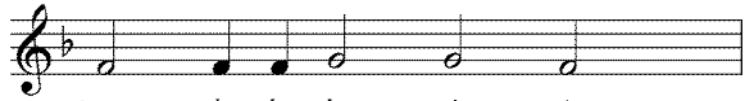
【 信者の聯禱 2 】

司祭) <sup>われらまたまたあんわ</sup>我等復又安和にして<sup>しゅ いの</sup>主に禱らん、



しゅあわれ めよ。  
主 憐

司祭) <sup>かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも</sup> 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



しゅ あわれ め よ。  
主 憐

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

司祭) ( 黙誦: <sup>ぜん</sup>善にして人<sup>ひと</sup>を愛する主<sup>あい</sup>や、我等<sup>しゅ</sup>復且<sup>われらまたかつしばしばなんぢ</sup> 数<sup>ふふく</sup> 爾<sup>なんぢ</sup> に俯伏し、爾<sup>いの</sup> に禱<sup>われ</sup>る、我等<sup>ら</sup>の禱<sup>いのり</sup>を顧<sup>かえり</sup>みて、我等<sup>われら</sup>の靈<sup>たましい</sup>と體<sup>からだ</sup>とを凡<sup>およ</sup>そ肉體<sup>にくたい</sup>と靈<sup>れいしん</sup>神<sup>けがれ</sup>との穢<sup>けがれ</sup>より  
<sup>いさぎよ</sup>潔<sup>われら</sup>くし、我等<sup>きず</sup>に、玷<sup>ていざい</sup>なく、定罪<sup>なんぢ</sup>なく、爾<sup>せい</sup>の聖<sup>さいだん</sup>なる祭壇<sup>まえ</sup>の前に立つ<sup>た</sup>を賜<sup>たま</sup>え、  
<sup>かみ</sup>神<sup>われら</sup>や、我等<sup>とも</sup>と偕<sup>きとう</sup>に祈禱<sup>もの</sup>する者<sup>いのち</sup>にも、生命<sup>しん</sup>と信<sup>ぞくしん</sup>と屬<sup>ちしき</sup>神<sup>しんぼ</sup>の智識<sup>あた</sup>との進歩<sup>あた</sup>を與<sup>え</sup>え  
<sup>たま</sup>給<sup>かれら</sup>え、彼等<sup>つね</sup>が常<sup>おそれ</sup>に畏<sup>あい</sup>と愛<sup>もつ</sup>とを以<sup>なんぢ</sup>て爾<sup>つと</sup>に務<sup>きず</sup>めて、玷<sup>ていざい</sup>なく、定罪<sup>なんぢ</sup>なく、爾<sup>なんぢ</sup>  
<sup>せいきみつ</sup>の聖機密<sup>う</sup>を領<sup>なんぢ</sup>け、爾<sup>てんごく</sup>の天國<sup>い</sup>に入る<sup>た</sup>に勝<sup>もの</sup>うる者<sup>え</sup>となる<sup>たま</sup>を得<sup>たま</sup>せしめ給<sup>え</sup>え、 )

司祭) <sup>われらつね なんぢ けんべい もと まも こうえい なんぢちち こ せいしん けん ため</sup>我等常に爾が權柄の下に護られて、光榮を爾父と子と聖神に獻ずるが爲なり、  
<sup>いま いつ よよ</sup>今も何時も世世に、

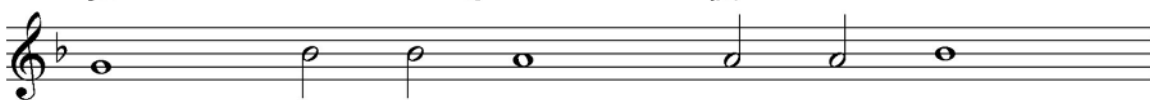


ア ミ ン。ア ミ ン。

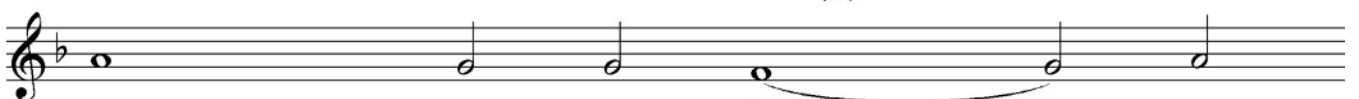
【 ヘルヴィムの歌 】



われら等 つつし いん  
我 等 慎 しいん



で ヘルヴィムに のつと  
法



り、 ヘルヴィムに

の お っ と り 、  
 法  
 せ い さ ん の う た あ  
 聖 い さ 三 ん の 歌 た あ  
 を い の ち を ほ ど  
 生 の 命 を 施 ど  
 こ す の せ い さ ん  
 聖 い さ 三 ん  
 しゃ に た て ま つ り  
 者 獻  
 て 、  
 こ の お よ の つ と め  
 此 の 世 の 勤 と め  
 を し り ぞ く べ し 、  
 退  
 し り ぞ お く べ え し 。  
 退

司祭) ( 黙誦：肉體の慾と快樂とに縛られし者は、一も爾光榮の王に來り、或は

近づき、或は奉事するに堪うるなし、蓋爾に奉事するは、天軍の爲にも大

にして畏るべきなり、然れども爾は言い難く量り難き爾の仁愛に因りて、本

性を易えず失わずして人となり、我等の爲に司祭首となり、又萬有の主宰

なるに縁りて、我等に此の奉事の無血祭の聖事を傳え給えり、蓋主我が神や、

爾は獨天地の事を宰理す、爾はヘルヴィムの寶座に荷わるる者、セラフィ

ム<sup>しゅ</sup>の主、イヅライリの王、<sup>おう</sup>獨<sup>ひとりせい</sup>聖にして聖者の中に息<sup>せいしゃ</sup>う者なり、故に我<sup>うち</sup>爾<sup>いこ</sup> <sup>もの</sup> <sup>ゆえ</sup> <sup>われなんぢ</sup>  
獨<sup>ひとりぜん</sup>善にして善く納<sup>よ</sup>るる者<sup>い</sup>に禱<sup>もの</sup>る、我<sup>われつみ</sup>罪ありて堪<sup>た</sup>えざる爾<sup>なんぢ</sup>の僕<sup>ぼく</sup>を顧<sup>かえり</sup>み、我が  
靈<sup>たましい</sup>と心<sup>こころ</sup>とを邪<sup>よこしま</sup>なる思慮<sup>しりよ</sup>より淨<sup>きよ</sup>め、我<sup>われしんびん</sup>神品<sup>おんちよう</sup>の恩<sup>こうむ</sup>寵<sup>もの</sup>を被<sup>は</sup>れる者を、  
爾<sup>なんぢ</sup>が聖神<sup>せいしん</sup>の力<sup>ちから</sup>に藉<sup>よ</sup>りて、此<sup>こ</sup>の爾<sup>なんぢ</sup>の聖<sup>せい</sup>なる食案<sup>しょくあん</sup>の前<sup>まえ</sup>に立<sup>た</sup>ち、爾<sup>なんぢ</sup>が至<sup>しじよう</sup>淨<sup>じよう</sup>  
なる聖體<sup>せいたい</sup>至尊<sup>しそん</sup>なる聖血<sup>せいけつ</sup>の機密<sup>きみつ</sup>を行<sup>おこな</sup>うに堪<sup>た</sup>うる者となし給<sup>たま</sup>え、蓋<sup>けだし</sup>我<sup>われ</sup>首<sup>くわい</sup>を  
屈<sup>かが</sup>めて爾<sup>なんぢ</sup>に就<sup>つ</sup>き、爾<sup>なんぢ</sup>に禱<sup>いの</sup>る、爾<sup>なんぢ</sup>の顔<sup>かん</sup>を我<sup>われ</sup>より避<sup>さ</sup>くる勿<sup>なか</sup>れ、我<sup>われ</sup>を爾<sup>なんぢ</sup>が僕<sup>ぼく</sup>  
衆<sup>しゅう</sup>の中<sup>うち</sup>より却<sup>しりぞ</sup>くる勿<sup>なか</sup>れ、乃<sup>すなわ</sup>我<sup>われ</sup>罪<sup>つみ</sup>有りて當<sup>あた</sup>らざる爾<sup>なんぢ</sup>の僕<sup>ぼく</sup>に此<sup>こ</sup>の祭物<sup>さいもつ</sup>を  
獻<sup>ささ</sup>ぐるを致<sup>いた</sup>させ給<sup>たま</sup>え、蓋<sup>けだし</sup>ハリストス我<sup>われ</sup>が神<sup>かみ</sup>よ、爾<sup>なんぢ</sup>は獻<sup>けん</sup>ずる者と獻<sup>けん</sup>ぜらるる者、  
受<sup>う</sup>くる者と頒<sup>わか</sup>たるる者なり、我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>光榮<sup>こうえい</sup>を爾<sup>なんぢ</sup>と爾<sup>なんぢ</sup>の無原<sup>むげん</sup>の父<sup>ちち</sup>と至<sup>しせい</sup>聖<sup>しぜん</sup>至<sup>ぜん</sup>善<sup>ぜん</sup>に  
して生命<sup>いのち</sup>を施<sup>ほどこ</sup>す爾<sup>なんぢ</sup>の神<sup>しん</sup>とに獻<sup>けん</sup>ず、今<sup>いま</sup>も何<sup>いつ</sup>時<sup>よ</sup>も世<sup>よ</sup>世<sup>よ</sup>に、 )

司祭) ( 黙誦: 我等奥密にしてヘルヴィムを像り、聖三の歌を生命を施す三者に歌い、

今此の世の慮を悉く退く可し、天使の軍の見えずして荷い奉る萬  
有の王を戴かんとするに縁る、ア ril l i a y a、ア ril l i a y a、ア ril l i a y a。我等奥密  
にしてヘルヴィムを像り、聖三の歌を生命を施す三者に歌い、今此の世の  
慮を悉く退く可し、天使の軍の見えずして荷い奉る萬有の王を  
戴かんとするに縁る、ア ril l i a y a、ア ril l i a y a、ア ril l i a y a。我等奥密にしてヘル  
ヴィムを像り、聖三の歌を生命を施す三者に歌い、今此の世の慮を  
悉く退く可し、天使の軍の見えずして荷い奉る萬有の王を戴かんと  
するに縁る、ア ril l i a y a、ア ril l i a y a、ア ril l i a y a。

神よ、我罪人を淨め給え、神よ、我罪人を淨め給え、神よ、我罪人を

淨め給え、 )

## 【 大聖入 】

司祭) 願くは主・神は其國に於て、我が國の天皇及び國を司る者を恒に記憶せん、

今も何時も世世に、

ねがわ しゅ かみ そのくに おい きょうかい つかさど そんな われら ぜんにつぼん ふしゅきょう  
願くは主・神は其國に於て、教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教

つね きおく いま いつ よよ  
セラフィムを恒に記憶せん、今も何時も世に、

ねがわ しゅ かみ そのくに おい すで ねむ ふしゅきょう ふしゅきょう ふ  
願くは主・神は其國に於て、已に寢りし府主教セルギイ、府主教イリネイ、府

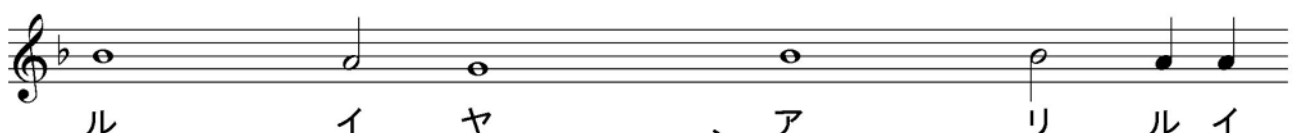
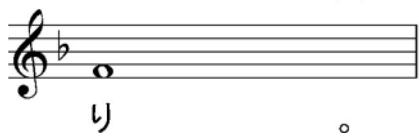
しゅきょう ふしゅきょう ふしゅきょう だいしゅきょう しゅ  
主教ウラディミル、府主教フェオドシイ、府主教ダニイル、大主教ニコライ、主

きょう しゅきょう およ こと きおく われら すで ねむ かぞく  
教ニコライ、主教ペトル、(及び殊に記憶せらるる某)我等の已に寢りし家族、

けいていしまい もろもろ えんしゃ ほうゆうら つね きおく いま いつ よよ  
兄弟姉妹、諸の縁者、朋友等を恒に記憶せん、今も何時も世に、

ねがわ しゅ かみ そのくに おい なんぢしゅうせいきょう ら およ こと き  
願くは主・神は其國に於て、爾衆正教のハリストティアニン等(及び殊に記

おく  
憶せらるる某)を恒に記憶せん、今も何時も世に、







ヤ、ア リ ル イ ヤ。

司祭) ( 黙誦: 尊とうときイオシフは 爾なんぢの 潔いさぎよき身を木より下し、淨きよき布ぬのに裹つつみ、香こうりょう料りょうにて

覆おおい、新あらたなる墓はかに藏おさめり、

ハリストスよ、爾なんぢは神かみなるにより、體からだにて墓はかに在あり、靈たましいにて地ぢごく獄あに在あり、

うとうとも てんどう あ ちち せいしん とも ほうぎ あ かぎり もの いてつ  
右うとう盜ともと偕てんどうに天あ堂ちちに在せいしんり、父ともと聖ほうぎ神あと共かぎりに寶もの座いてつに在あり、限かぎりなき者ものとして一いてつ

さい み たま  
切さいを満みて給たまえり、

ハリストスよ、我わが復ふくかつ活いづみの泉なんぢたる 爾はかの墓いのちは、生ほどこ命ものを施ちどうす者ちどう、地ちどう堂ちどうより

うるわ もの じつ いか おう みや かがや もの あらわ  
美うるわしき者もの、実じつに如いか何おうなる王みやの宮かがやよりも耀ものける者あらわと顯あらわれたり、

とうと 尊とうときイオシフは 爾なんぢの 潔いさぎよき身を木より下し、淨きよき布ぬのに裹つつみ、香こうりょう料りょうにて

覆おおい、新あらたなる墓はかに藏おさめり、

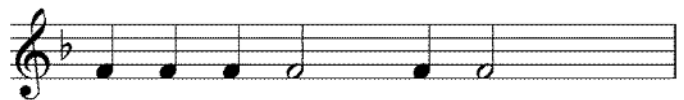
しゅ なんぢ めぐみ よ おん た た  
主しゅよ、爾なんぢの 惠めぐみに因よりて恩おんをシオンたに垂たれ、イエルサリムじょうえんの 城た垣たまを建たて給

そのとき なんぢぎ まつり ささげもの やきまつり よろこ う そのとき ひとびとなんぢ  
え、其そのとき時に 爾なんぢぎ義まつりの祭ささげもの、獻やきまつり物よろこと燔う祭そのときを喜ひとびとび饗なんぢけん、其そのとき時に人ひと人びと 爾なんぢ

さいだん こうし そな  
の祭さいだん壇こうしに 犢そなを奠そなえんとす、 )

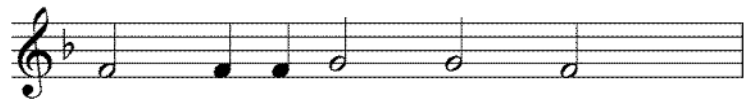
【 増聯誦 】

司祭) 我われ等らしゅ主まえの 前わに吾いのりが 禱まを 増くわし加くわえん、



しゅ あ わ れ め よ 。  
主 憐

司祭) 獻ささげたる 尊とうとき祭さいひん品ための 爲しゅに主いのに 禱いのらん、



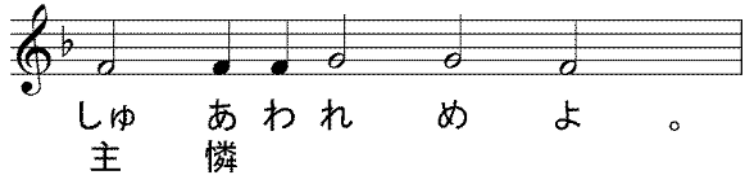
しゅ あ わ れ め よ 。  
主 憐

司祭) 此この 聖せい堂どう、及および信しんと 慎つつしみと神かみを畏おそるる 心こころとを以もつて此こに 來きたる者ものの 爲ために主しゅに 禱いのらん、

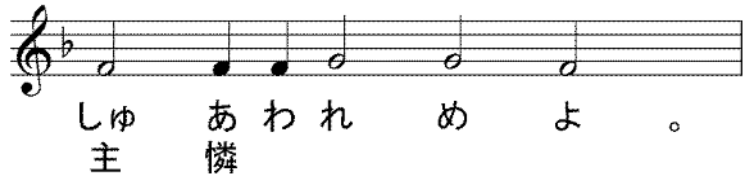
ん、



司祭) われらもろもろ <sup>うれい</sup>の憂愁と<sup>いかり</sup>忿怒と<sup>あやうき</sup>危難とを<sup>まぬか</sup>免るが<sup>ため</sup>爲に<sup>しゅ</sup>主に<sup>いの</sup>禱らん、



司祭) <sup>かみ</sup>神よ、<sup>なんぢ</sup>爾の<sup>おんちよう</sup>恩寵を<sup>もつ</sup>以て、<sup>われら</sup>我等を<sup>たす</sup>助け<sup>すく</sup>救い<sup>あわれ</sup>憐み<sup>まも</sup>護れよ、



司祭) <sup>こ</sup>此の<sup>ひ</sup>日の<sup>じゅんぜん</sup>純全・<sup>せいせい</sup>成聖・<sup>へいあん</sup>平安・<sup>むざい</sup>無罪ならんことを<sup>しゅ</sup>主に<sup>もと</sup>求む、



司祭) <sup>へいあん</sup>平安の<sup>てんし</sup>天使、<sup>ただ</sup>正しき<sup>きょうどうし</sup>教導師、<sup>わ</sup>吾が<sup>れいたい</sup>靈體の<sup>しゅごしや</sup>守護者を<sup>たま</sup>賜わんことを<sup>しゅ</sup>主に<sup>もと</sup>求む、



司祭) <sup>われら</sup>我等の<sup>つみ</sup>罪と<sup>あやまち</sup>過とを<sup>なだ</sup>宥め<sup>ゆる</sup>赦さんことを<sup>しゅ</sup>主に<sup>もと</sup>求む、



司祭) <sup>われら</sup>我等の<sup>たましい</sup>靈に<sup>ぜん</sup>善にして<sup>えき</sup>益ある<sup>こと</sup>事、<sup>およ</sup>及び<sup>せかい</sup>世界に<sup>へいあん</sup>平安を<sup>たま</sup>賜わんことを<sup>しゅ</sup>主に<sup>もと</sup>求む、



司祭) <sup>われら</sup>我等の<sup>いのち</sup>生命の<sup>よじつ</sup>餘日を<sup>へいあん</sup>平安と<sup>つうかい</sup>痛悔とを<sup>もつ</sup>以て<sup>おわ</sup>終らんことを<sup>しゅ</sup>主に<sup>もと</sup>求む、



司祭) <sup>われら</sup>我等の<sup>いのち</sup>生命の<sup>おわり</sup>終が<sup>かな</sup>ハリスティアニンに<sup>やまい</sup>適い、<sup>はぢ</sup>疾なく、<sup>へいあん</sup>耻なく、<sup>およ</sup>平安なること、及び

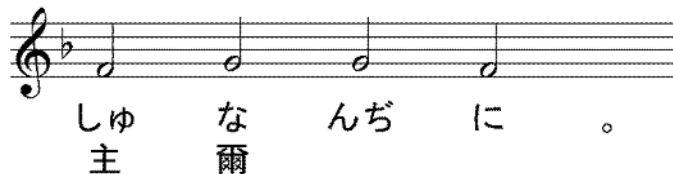
ハリストスの畏るべき審判に於て宜しき對をなすを賜わんことを求む、



司祭) 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤ

と、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉く

の我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭) ( 黙誦: 主・神・全能者、獨聖にして心を盡して爾を籲ぶ者より讚美の祭

を受くる者よ、我等罪人の禱をも受けて爾の聖なる祭壇に携え、我等を、

我が罪と衆人の過との爲に、爾に獻物と屬神の祭とを獻ずるに

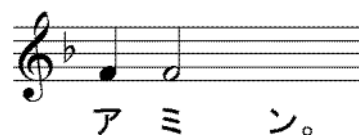
勝うる者となし給え、我等に爾の前に恩寵を得せしめて、我等の祭は

爾に善く納れらる者となり、爾が恩寵の善神は臨みて、我等の中と此の

供えられたる祭品と爾の衆人と共に居るを致させ給え、 )

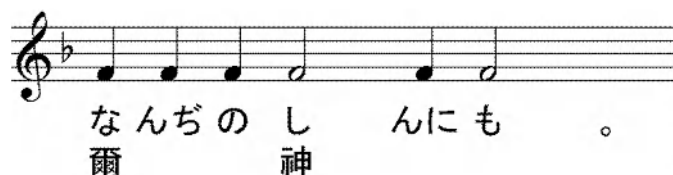
司祭) 爾の獨生子の慈憐に因りてなり、爾は彼と至聖至善にして生命を施す爾の神

と偕に崇め讃めらる、今も何時も世々に、



【 ニケア・コンスタンチヌーポリ全地公会にて採択されし信經 】

司祭) 衆人に平安、



司祭) 我等互に相愛すべし、同心にして承け認めんが爲なり、

ち ち と こ と せ い し ん の 、 い た い に し  
 父 子 聖 神 一 體

て わ か れ ざ る せ い さ ん し ゃ を 、  
 分 聖 三 者

司祭) ( 黙誦：主<sup>しゅ</sup>我<sup>ちから</sup>の力<sup>われなんぢ</sup>よ、我<sup>あい</sup>爾<sup>しゅ</sup>を愛<sup>われ</sup>せん、主<sup>かため</sup>は我<sup>われ</sup>の防<sup>かくれが</sup>固<sup>しゅ</sup>なり、我<sup>しゅ</sup>の避<sup>しゅ</sup>所<sup>ちから</sup>なり、主<sup>われ</sup>我<sup>われ</sup>の  
 力<sup>ちから</sup>よ、我<sup>われなんぢ</sup>爾<sup>あい</sup>を愛<sup>しゅ</sup>せん、主<sup>しゅ</sup>は我<sup>われ</sup>の防<sup>かため</sup>固<sup>われ</sup>なり、我<sup>かくれが</sup>の避<sup>しゅ</sup>所<sup>ちから</sup>なり、主<sup>われ</sup>我<sup>われ</sup>の  
 爾<sup>なんぢ</sup>を愛<sup>あい</sup>せん、主<sup>しゅ</sup>は我<sup>われ</sup>の防<sup>かため</sup>固<sup>われ</sup>なり、我<sup>かくれが</sup>の避<sup>しゅ</sup>所<sup>ちから</sup>なり、 )

司祭) 門<sup>もん</sup>、門<sup>もん</sup>、敬<sup>つつし</sup>み<sup>き</sup>て聽<sup>き</sup>くべし、

わ れ し ん ず 、 ひ と つ の か み ち ち ぜ ん の う し ゃ 、 て ん  
 我 信 一 神 父 全 能 者 天

と ち 、 み ゆ る と み え ざ る ば ん ぶ つ を つ く り し  
 地 見 見 萬 物 造

しゅ を 、 ま た し ん ず 、 ひ と つ の しゅ イ イ ス ス  
 主 又 信 一 主

ハ リ ス ト ス か み の ど く せ い の こ 、 よ ろ づ よ の さ  
 神 獨 生 子 萬 世 前

き に ち ち よ り う ま れ 、 ひ か り よ り の ひ か り 、  
 父 生 光 光

ま こ と の か み よ り の ま こ と の か み 、 う ま  
 眞 神 眞 神 生

れ し も の に て つ く ら れ し に あ ら ず 、 ち ち  
 者 造 非 父

と い っ た い に し て ば ん ぶ つ か れ に つ く ら れ 、  
 一 體 萬 物 彼 造

われらひとびとのため、またわれらのすくい  
 我等一人一人の爲、又我等の救

のためにてんよりくだり、せいしんおよび  
 爲天降、聖神及

どうていぢよマリヤよりみをとりひととな  
 童貞女リヤより身取人

り、われらのためにポンティイピラトのときじゅう  
 我等爲、の時十

じかにくぎうたれ、くるしみをうけほう  
 字釘、苦受葬

むられ、だいさんじつにせいしょにかないて  
 第三日、聖書應

ふくかつし、てんのぼり、ちちのみぎに  
 復活、天升、父右

ざし、こうえいをあらわしていけるもの  
 坐、光榮、顯生、者

としせしものとしんぱんするのためにまたきた  
 死、者、の、審判、爲、還、來

り、そのくにおわりなからんを、またしん  
 其、國、終、又、信

ず、せいしんしゅいのちをほどこすものちちより  
 聖神主生、命、施、者、父

いで、ちちおよびことともにおがまれほ  
 出、父、及、子、共、拜、が、ま、れ、讚

められ、よげんしゃをもつてかつていいしを、  
 預言者以嘗言

またしんず、ひとつのせいなるおおやけなるし使  
 又信一聖公使

とのきょうかいを、われみとむ、ひとつの  
 徒教會我認一

せんれい、もつてつみのゆるしをうるを、  
 洗禮以罪赦得

われのぞむししゃのふくかつ、ならびに  
 我望死者復活並

らいせいのいのちを、アミン。  
 來世生命

【 アナフォラ 】

司祭) <sup>ただ</sup>正しく立ち、<sup>た</sup>畏れて立ち、<sup>おそ</sup>敬みて<sup>た</sup>安和にして<sup>つつし</sup>聖なる<sup>あんわ</sup>獻物を<sup>せい</sup>奉らん、<sup>ささげもの</sup>  
 親 <sup>たてまつ</sup>

したしみのささげもの、ほめあげの  
 親 獻物 讃揚

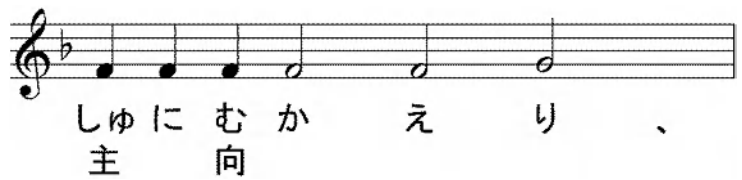
まつりを、  
 祭

司祭) <sup>ねがわ</sup>願くは我が<sup>わ</sup>主<sup>しゅ</sup>イイススハリストスの<sup>めぐみ</sup>恩、<sup>かみちち</sup>神父の<sup>いつくしみ</sup>慈、<sup>せいしん</sup>聖神の<sup>したしみ</sup>親は、<sup>なんぢしゅう</sup>爾衆

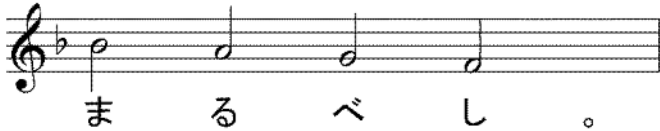
<sup>じん</sup>人と<sup>とも</sup>偕に<sup>あ</sup>在らんことを、

なんぢのしんとも、  
 爾 神

司祭) <sup>こころうえ</sup>心上<sup>むか</sup>に向うべし、



司祭) <sup>しゆ かんしゃ</sup> 主に感謝すべし、



司祭) ( 黙誦: <sup>なんぢ かしょう なんぢ さんよう なんぢ さんび なんぢ かんしゃ なんぢ いつさい</sup> 爾を歌頌し、爾を讃揚し、爾を讃美し、爾に感謝し、爾が一切

<sup>おさ ところ おい なんぢ ふ おが とうぜん ぎ けだしなんぢ なんぢ ぞく</sup> 治むる處に於て爾に伏し拜むは當然にして義なり、蓋爾と爾の獨

<sup>せいし なんぢ せいしん い がた し がた み ベ はか ベ なが</sup> 生子と爾の聖神は、言い難く、知り難く、見る可からず、測る可からず、永

<sup>あ つね かわ かみ なんぢ われら む ゆう おちい もの また</sup> く在り、恒に變らざる神なり、爾は我等を無より有となし、陥りし者を復

<sup>おこ およ われら てん のぼ なんぢ らいせい くに たま いた ばんじ</sup> 起し、及び我等を天に升らしめて、爾が來世の國を賜うに至るまで萬事を

<sup>おこな や これら ため およ われら し ところ し ところ あらわ ところ</sup> 行いて止めず、此等の爲に、凡そ我等が知る所、知らざる所、顯れし所、

<sup>あらわ ところ われら たま しょおん ため われらなんぢ なんぢ ぞくせいし</sup> 顯れざりし所の我等に賜わりし諸恩の爲に、我等爾と爾の獨生子と

<sup>なんぢ せいしん かんしゃ またこ ほうじ ため なんぢ かんしゃ なんぢこれ われら</sup> 爾の聖神とに感謝す、又此の奉事の爲に爾に感謝す、爾之を我等の

<sup>て う あまん たま しか せんせん てんししゅおよ まんまん てんし</sup> 手より領くるを甘じ給えり、然れども千千の天使首及び萬萬の天使、ヘル

<sup>およ りくよく もの たもく もの たか かけ もの つばさ そな もの</sup> ヴィム及びセラフィム、六翼の者、多目の者、高く翔る者、翼を具うる者

<sup>なんぢ まえ た</sup> は爾の前に立ちて、 )

司祭) <sup>かちうた うた よ さけ い</sup> 凱歌を歌い、籲び、叫びて曰う、



なんぢのこおえ いはあまねし、いとたか  
 爾光榮 普 至高  
 きにオサンナ、しゆのなにてきたるものは  
 主名 來者  
 あがめほめらる、いとたかきに  
 崇 讚 至高  
 オサンナ。

司祭) ( 黙誦：人<sup>ひと</sup>を愛<sup>あい</sup>する主<sup>しゆ</sup>宰<sup>さい</sup>よ、我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>も此<sup>こ</sup>の福<sup>ふく</sup>たる軍<sup>ぐん</sup>と偕<sup>とも</sup>に籲<sup>よ</sup>びて曰<sup>い</sup>う、聖<sup>せい</sup>なる哉<sup>かな</sup>、至<sup>し</sup>  
 聖<sup>せい</sup>なる哉<sup>かな</sup>、爾<sup>なんぢ</sup>と爾<sup>なんぢ</sup>の獨<sup>どく</sup>生子<sup>せいし</sup>と爾<sup>なんぢ</sup>の聖<sup>せい</sup>神<sup>しん</sup>、聖<sup>せい</sup>なる哉<sup>かな</sup>、至<sup>し</sup>聖<sup>せい</sup>なる哉<sup>かな</sup>、爾<sup>なんぢ</sup>  
 の光<sup>こう</sup>榮<sup>えい</sup>は威<sup>い</sup>嚴<sup>げん</sup>なり、爾<sup>なんぢ</sup>は爾<sup>なんぢ</sup>の世<sup>せ</sup>界<sup>かい</sup>を愛<sup>あい</sup>して、爾<sup>なんぢ</sup>の獨<sup>どく</sup>生子<sup>せいし</sup>を賜<sup>たま</sup>うに至<sup>いた</sup>り、  
 およこれしんものちんりんまぬかえいせいえかれきたおよわれら  
 凡<sup>お</sup>そ之<sup>て</sup>を信<sup>せい</sup>ずる者<sup>ぜん</sup>に沈<sup>わた</sup>淪<sup>よ</sup>を免<sup>ただ</sup>れて永<sup>い</sup>生<sup>みづか</sup>を得<sup>おのれ</sup>せしむ、彼<sup>せ</sup>來<sup>かい</sup>りて、凡<sup>いのち</sup>そ我<sup>い</sup>等<sup>ち</sup>  
 爲<sup>ため</sup>に付<sup>わた</sup>し夜<sup>よ</sup>、其<sup>その</sup>聖<sup>せい</sup>にして至<sup>し</sup>淨<sup>じょう</sup>無<sup>む</sup>玷<sup>てん</sup>なる手<sup>て</sup>に餅<sup>へい</sup>を取<sup>と</sup>り、感<sup>かん</sup>謝<sup>しゃ</sup>し、祝<sup>しゅく</sup> 讚<sup>さん</sup>し、  
 成<sup>せい</sup>聖<sup>せい</sup>し、擘<sup>さ</sup>きて其<sup>その</sup>聖<sup>せい</sup>なる門<sup>もん</sup>徒<sup>と</sup>及<sup>お</sup>び使<sup>し</sup>徒<sup>と</sup>に予<sup>あた</sup>えて曰<sup>い</sup>えり、 )

司祭) 取<sup>と</sup>りて食<sup>くら</sup>え、是<sup>これ</sup>我<sup>わ</sup>が體<sup>たい</sup>、爾<sup>なんぢ</sup>等<sup>ら</sup>の爲<sup>ため</sup>に擘<sup>さ</sup>かるる者<sup>もの</sup>、罪<sup>つみ</sup>の赦<sup>ゆるし</sup>を得<sup>え</sup>るを致<sup>いた</sup>す、

ア ミ ン。

司祭) ( 黙誦：同<sup>おなじ</sup>く晚<sup>ばん</sup>餐<sup>さん</sup>の<sup>の</sup>後<sup>ち</sup>に爵<sup>しゃく</sup>を執<sup>と</sup>りて曰<sup>いわ</sup>く、 )

司祭) 皆<sup>みな</sup>之<sup>これ</sup>を飲<sup>の</sup>め、是<sup>これ</sup>我<sup>われ</sup>の新<sup>しん</sup>約<sup>やく</sup>の血<sup>ち</sup>、爾<sup>なんぢ</sup>等<sup>ら</sup>及<sup>お</sup>び衆<sup>しゆ</sup>くの人<sup>ひと</sup>の爲<sup>ため</sup>に流<sup>なが</sup>さるる者<sup>もの</sup>、罪<sup>つみ</sup>の赦<sup>ゆるし</sup>  
 を得<sup>え</sup>るを致<sup>いた</sup>す、

ア ミ ン。



司祭) ( 黙誦: <sup>ゆえ われらこ すくい ほどこ いましめ およ およ われら ため あ こと すなわちじゅう</sup> 故に我等此の救を施す誠、及び凡そ我等の爲に有りし事、即 十  
<sup>じか はか だいさんじつ ふくかつ てん のぼ こと みぎ ざ こと こうえい さいど</sup> 字架、墓、第三日の復活、天に升る事、右に坐する事、光榮なる再度の  
<sup>こうりん きおく</sup> 降臨を記憶して、 )

司祭) <sup>なんぢ たまもの なんぢ しょぼく しゅう ためいつさい ため なんぢ たてまつ</sup> 爾の賜を、爾の諸僕より、衆の爲一切の爲に爾に 獻りて、

しゅ う や あ、なんぢ  
 主 爾  
 を あ が め う た い、  
 な んぢ あ んぢ を ほ め め あ  
 げ、なんぢ んぢ に か んしゃ  
 感謝 し、わ が か み や  
 我 神 なる 祈 の る、  
 な んぢ に い の る、  
 な んぢ に い の 祈 の る。  
 る。

司祭) ( 黙誦: <sup>われらまたなんぢ これいち むけつ ほうじ けん ねが いの せつ もと なんぢ</sup> 我等復 爾に此の靈智なる無血の奉事を獻じて、願ひ祈り切に求む、爾  
<sup>せいしん われらおよ こ そな さいひん つかわ たま</sup> の聖神を我等及び此の奠えたる祭品に遣し給え、 )

司祭) ( 黙誦: <sup>だいさんじ なんぢ しせいしん なんぢ しと つか しぜん しゅ これ われら と</sup> 第三時に 爾の至聖神を 爾の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より取  
<sup>あ なか なおわれらなんぢ いの もの うち これ あらた かみ いさぎよ</sup> り上ぐる事勿れ、尚我等 爾に祈る者の衷に之を新にせよ、神よ、潔

こころ われ つく ただ たましい われ うち あらた たま  
き 心を我に造り、正しき 靈 を我の衷に 改め給え、

だいさんじ なんぢ しせいしん なんぢ しと つか しぜん しゅ これ われら  
第三時に 爾 の至聖神を 爾 の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より  
と あ なか なおわれらなんぢ いの もの うち これ あらた われ なんぢ  
取り上ぐる事勿れ、尚 我等 爾 に祈る者の衷に之を 新 にせよ、我を 爾 の

かんばせ お なか なんぢ せいしん われ と あ なか  
顔 より逐う事勿れ、 爾 の聖神を我より取り上ぐる事勿れ、

だいさんじ なんぢ しせいしん なんぢ しと つか しぜん しゅ これ われら  
第三時に 爾 の至聖神を 爾 の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より  
と あ なか なおわれらなんぢ いの もの うち これ あらた  
取り上ぐる事勿れ、尚 我等 爾 に祈る者の衷に之を 新 にせよ、 )

司祭) この餅を將て、 爾 のハリストスの尊體と成し、アミン。

こ しゃくちゆう もの もつ なんぢ そんけつ な  
此の 爵 中 の者を將て、 爾 のハリストスの尊血と成し、アミン。

なんぢ せいしん もつ これ へんか  
爾 の聖神を以て之を變化せよ、アミン。アミン。アミン。

( 黙誦: 願 くは此は領くる者の爲に、 靈 の警醒となり、諸罪の赦 となり、 爾

せいしん たいごう てんごく え なんぢ お ゆうかん しんあん  
が聖神の體合となり、天國を得ることとなり、 爾 に於ける勇敢となり、審案

あるい ていざい  
或 は定罪とならざらんことを、

また れいち ほうじ しん もつ ねむ げんそ れつそ たいそ よげんしゃ しと  
又この靈智なる奉事を、信を以て寝りし元祖・列祖・太祖・預言者・使徒・

でんどうしゃ ふくいんしゃ ちめいしゃ ひょうしんしゃ せつせいしゃ およ およ しん もつ おわ  
傳道者・福音者・致命者・表 信者・節制者、及び凡そ信を以て終

ぎ たましい ため なんぢ けん  
りし義なる 靈 の爲に 爾 に獻ず、 )

司祭) 特に至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女 宰・生神女・永貞童女マ

リヤの爲、

【 常に福 】 ※祭日に他の「生神女の歌」を歌う例あり

つねにさいわいにしてまったくきずなき  
常 福 全 玷

しょうしんぢよ。わがかみのははたるなんぢを  
生 神 女 。 我 神 母 は たる 爾 を



さいわいなりととの うるはまことにあた  
福 称 真 當



れり。



ヘルヴィムよりと うとくセラフィムにならびなく  
尊 並



さかえ、みさおをやぶらずしてかみこと  
榮 貞操 壞 神言



ばをうみし、じつのしょうしんぢよたるなんぢ  
生 實 生 神女 爾



をあげめほむ。  
崇 讚

司祭) ( 黙誦：<sup>せいよげんしゃ</sup>聖預言者・<sup>ぜんく</sup>前驅・<sup>じゅせん</sup>授洗イオアン、<sup>こうえい</sup>光榮にして<sup>さんび</sup>讚美たる<sup>せいしと</sup>聖使徒、<sup>およ</sup>及び<sup>なんぢ</sup>爾が

<sup>しよせいじん</sup>諸聖人の爲に<sup>ため</sup>獻ず、<sup>けん</sup>神よ、<sup>かみ</sup>彼等の<sup>かれら</sup>祈禱に<sup>きとう</sup>因りて<sup>よ</sup>我等を<sup>われら</sup>顧み、<sup>かえり</sup>並に<sup>ならび</sup>凡そ

<sup>えいせい</sup>永生の<sup>ふかつ</sup>復活の<sup>のぞみ</sup>望を<sup>いだ</sup>懐きて<sup>ねむ</sup>寝りし<sup>もの</sup>者を<sup>きおく</sup>記憶して、<sup>かれら</sup>彼等を<sup>なんぢ</sup>爾が<sup>かんばせ</sup>顔の<sup>ひかり</sup>光

<sup>てら</sup>の<sup>ところ</sup>照す<sup>あんそく</sup>所に<sup>たま</sup>安息せしめ<sup>たま</sup>給え、

又<sup>また</sup>爾に<sup>なんぢ</sup>禱る、<sup>いの</sup>主よ、<sup>しゅ</sup>爾が<sup>なんぢ</sup>眞實の<sup>しんじつ</sup>言を<sup>ことば</sup>正しく<sup>ただ</sup>傳うる<sup>つた</sup>正<sup>せいきょうしゃ</sup>教者の<sup>およ</sup>凡の

<sup>しゅきょうひん</sup>主教品、<sup>およ</sup>凡の<sup>しさいひん</sup>司祭品、<sup>よ</sup>ハリストスに<sup>ほさいひん</sup>因る<sup>およ</sup>輔祭品、<sup>ことごと</sup>及び<sup>しんぴん</sup>悉くの<sup>しんぴん</sup>神品を

<sup>きおく</sup>記憶せよ、

又<sup>また</sup>此の<sup>れいち</sup>靈智なる<sup>ほうじ</sup>奉事を、<sup>ぜんせかい</sup>全世界の爲、<sup>せい</sup>聖・<sup>こう</sup>公・<sup>しと</sup>使徒の<sup>きょうかい</sup>教會の爲、<sup>ため</sup>潔淨

にして<sup>とうと</sup>尊く<sup>いのち</sup>生を<sup>わた</sup>度る<sup>もの</sup>者の爲、<sup>ため</sup>我が<sup>わくに</sup>國の<sup>てんのう</sup>天皇<sup>およ</sup>及び<sup>くに</sup>國を<sup>つかさど</sup>司る<sup>もの</sup>者の爲に

<sup>なんぢ</sup>爾に<sup>けん</sup>獻ず、<sup>しゅ</sup>主よ、<sup>かれら</sup>彼等に<sup>たいへい</sup>泰平の<sup>こくせい</sup>國政を<sup>たま</sup>賜え、<sup>われら</sup>我等も<sup>かれら</sup>彼等の<sup>へいわ</sup>平和により、

<sup>およ</sup>凡の<sup>けいけん</sup>敬虔と<sup>けつじょう</sup>潔淨とを<sup>もつ</sup>以て、<sup>てんせいあんぜん</sup>恬静安然にして<sup>いのち</sup>生を<sup>わた</sup>度らんが<sup>ため</sup>爲なり、 )

司祭) <sup>しゅ</sup>主よ、<sup>こと</sup>殊に<sup>きょうかい</sup>教會を<sup>つかさど</sup>司る<sup>そんき</sup>尊貴なる<sup>われら</sup>我等の<sup>ぜんにっぽん</sup>全日本の<sup>ふしゅきょう</sup>府主教<sup>きおく</sup>セラフィムを<sup>きおく</sup>記憶し、

かれ へいあん ぶなん そんき そうけん ちょうじゅ もの およ なんぢ しんじつ ことば ただ つた  
彼を平安・無難・尊貴・壮健・長壽なる者、及び爾が眞實の言を正しく傳う

もの なんぢ せい きょうかい あた たま  
る者として、爾の聖なる教會に與え給え、



司祭) ( 黙誦：主よ、我等が居る所の此の都邑と凡の都邑と地方、及び信を以て此の中

に居る者を記憶せよ、主よ、航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱

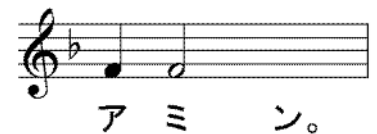
難に遭う者、擲となりし者、及び彼等の救を記憶せよ、主よ、爾の諸聖

堂に物を獻り、善業を行う者、及び貧者を記念する者を記憶し、及

び我等衆人に爾の憐を垂れ給え、 )

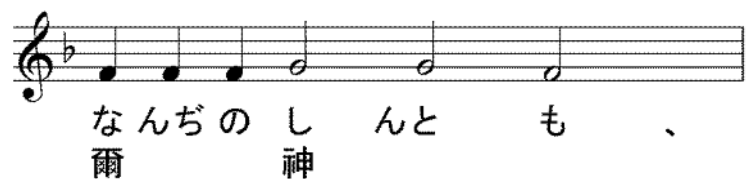
司祭) 並に我等に、口を一にし心を一にして、爾父と子と聖神の至尊至嚴の名を讃

えいさんしょう たま いま いつ よよ  
榮讚頌するを賜え、今も何時も世世に、



司祭) 願くは大なる神、我が救主イイススハリストスの憐は、爾衆人と偕に在ら

んことを、

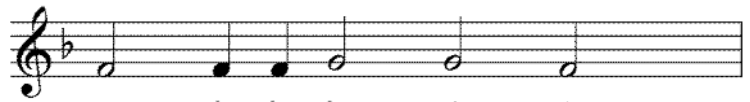


### 【 増聯禱 】

司祭) 我等諸聖人を記憶して、復又安和にして主に禱らん、



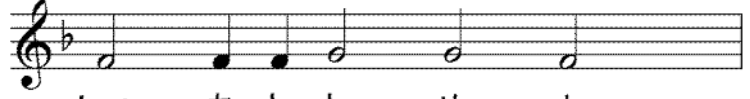
司祭) 已に獻ぜられ及び聖にせられし尊き祭品の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

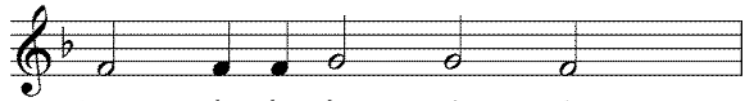
司祭) <sup>ひと あい わ かみ これ そのせい てんじょう むけい さいだん お ぞくしん けいこう</sup>  
人を愛する我が神が、之を其聖なる天上の無形の祭壇に置き、屬神の馨香と

<sup>う われら むく しんみょう おんちよう せいしん たまもの くだ ため いの</sup>  
して享け、我等に報いて、神妙の恩寵と聖神の賜とを降すが爲に禱らん、



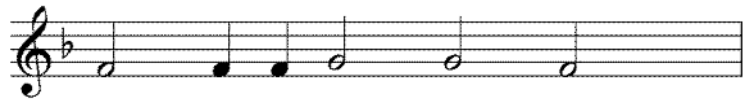
しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>われら もろもろ うれい いかり あやうき まぬか ため しゅ いの</sup>  
我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るが爲に主に禱らん、



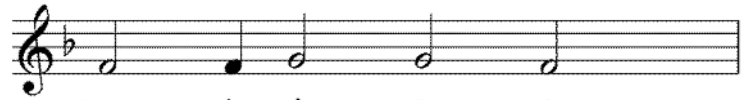
しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも</sup>  
神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



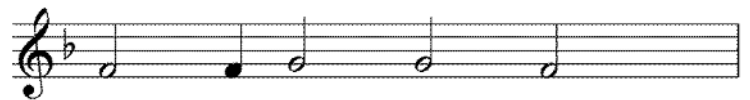
しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>こ ひ じゅんぜん せいせい へいあん むざい しゅ もと</sup>  
此の日の純全、成聖、平安、無罪ならんことを主に求む、



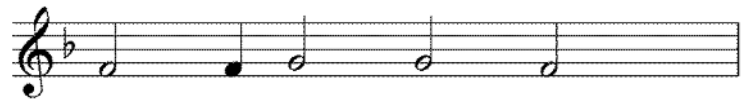
しゅ たま え よ 。  
主 賜

司祭) <sup>へいあん てんし ただ きょうどうし わ れいたい しゅごしや たま しゅ もと</sup>  
平安の天使、正しき教導師、吾が靈體の守護者を賜わんことを主に求む



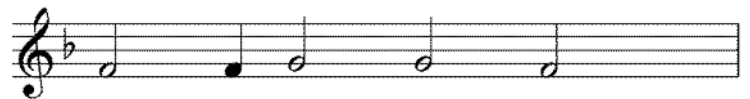
しゅ たま え よ 。  
主 賜

司祭) <sup>われら つみ あやまち なだ ゆる しゅ もと</sup>  
我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む、



しゅ たま え よ 。  
主 賜

司祭) <sup>われら たましい ぜん えき こと およ せかい へいあん たま しゅ もと</sup>  
我等の靈に善にして益ある事、及び世界に平安を賜わんことを主に求む、



しゅ たま え よ 。  
主 賜

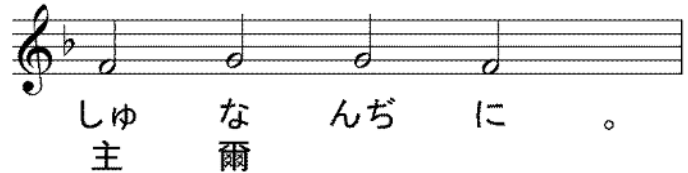
司祭) <sup>われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ しゅ もと</sup> 我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、



司祭) <sup>われら いのち おわり かな やまい はぢ へいあん およ</sup> 我等の生命の終がハリストティアニンに適い、疾なく、耻なく、平安なること、及び  
<sup>おそ しんばん おい よろ こたえ たま もと</sup> ハリストスの畏るべき審判に於て宜しき對をなすを賜わんことを求む、



司祭) <sup>しん どういつ せいしん たいごう もと われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび</sup> 信の同一と聖神の體合とを求めて、我等己の身及び互に各の身を以て、并  
<sup>ことごと われら いのち もつ かみ いたく</sup> に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭) ( <sup>ひと あい しゅさい われら わ ことごと いのち のぞみ なんぢ ゆだ ねが</sup> 黙誦：人を愛する主宰よ、我等は我が悉くの生命と望とを爾に委ねて、願  
<sup>いの せつ もと われら きよ りょうしん もつ なんぢ てんじょう おそ きみつ</sup> い祈り切に求む、我等に、淨き良心を以て、爾が天上の畏るべき機密、  
<sup>こ せい ぞくしん えん あづか たま こ つみ ゆるし あやまち надめ</sup> 此の聖せられたる屬神の筵に與るを賜いて、此れが罪の赦、過の宥、  
<sup>せいしん たいごう てんごく しぎょう なんぢ お ゆうかん しんあんあるい ていざい</sup> 聖神の體合、天國の嗣業、爾に於ける勇敢となりて、審案或は定罪  
<sup>いた たま</sup> とならざるを致させ給え、 )

【 天主經 】

司祭) <sup>しゅさい われら いさみ もつ つみ え あえ なんぢてん かみちち よ い たま</sup> 主宰よ、我等に勇を以て、罪を獲ずして、敢て爾天の神父を籲びて言うを賜え、



が ごとく ちにも おこなわれん。わが にちよう  
 如 地 行 我 日 用  
 の か て を こん に ち わ れ ら に あ た え た ま え 。  
 糧 今日 我 等 與 給  
 わ れ ら に お い め あ る も の を わ れ ら ゆ る す が ご  
 我 等 債 者 我 等 免 如  
 と ぐ く 、 わ れ ら の お い め を ゆ る し た ま  
 我 等 債 免 給  
 え 。 わ れ ら を い ざ な い に み ち び か ず 、  
 我 等 誘 導  
 な お わ れ ら を き ょう あ く よ り す く い た ま  
 猶 我 等 凶 惡 救 給  
 え 。

司祭) <sup>けだしくに けんとう こうえい なんぢちち こせいしん き いま いつ よよ</sup> 蓋 國と權能と光榮は爾 父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、

アミン。

司祭) <sup>しゅうじん へいあん</sup> 衆 人に平安、

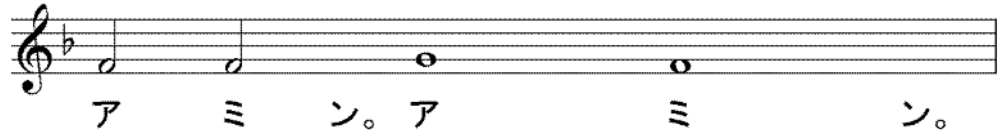
なんぢのしんにも。  
爾 神

司祭) <sup>なんぢら こうべ しゅ かが</sup> 爾等の首を主に屈めよ、

しゅなんぢに。  
主 爾 に

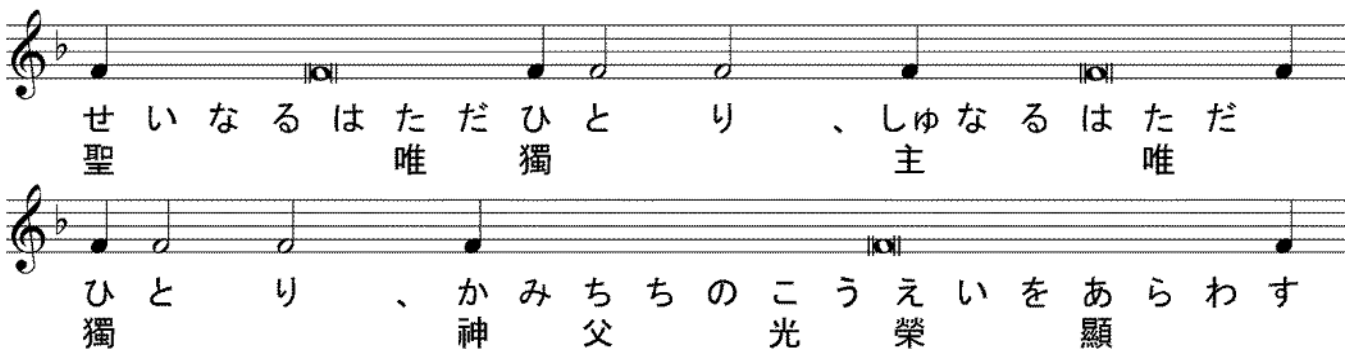
司祭) ( 黙誦: <sup>み</sup> <sup>べ</sup> <sup>おう</sup> <sup>その</sup> <sup>は</sup> <sup>か</sup> <sup>が</sup> <sup>た</sup> <sup>の</sup> <sup>う</sup> <sup>り</sup> <sup>よ</sup> <sup>く</sup> <sup>も</sup> <sup>つ</sup> <sup>ばん</sup> <sup>ゆう</sup> <sup>か</sup> <sup>く</sup> <sup>て</sup> <sup>い</sup> <sup>その</sup> <sup>じ</sup> <sup>れ</sup> <sup>ん</sup> <sup>お</sup> <sup>お</sup>  
 きを以て萬物を無より有となしし主よ、我等爾に感謝す、主宰よ、爾  
<sup>みつ</sup> <sup>か</sup> <sup>なん</sup> <sup>ち</sup> <sup>こう</sup> <sup>べ</sup> <sup>か</sup> <sup>が</sup> <sup>もの</sup> <sup>て</sup> <sup>ん</sup> <sup>か</sup> <sup>え</sup> <sup>り</sup> <sup>たま</sup> <sup>け</sup> <sup>だ</sup> <sup>し</sup> <sup>け</sup> <sup>つ</sup> <sup>に</sup> <sup>く</sup> <sup>か</sup> <sup>が</sup> <sup>あ</sup> <sup>ら</sup>  
 親ら爾に首を屈めし者を天より顧み給え、蓋血肉に屈めしに非ず、  
<sup>す</sup> <sup>な</sup> <sup>わ</sup> <sup>ち</sup> <sup>なん</sup> <sup>ち</sup> <sup>お</sup> <sup>そ</sup> <sup>か</sup> <sup>み</sup> <sup>か</sup> <sup>が</sup> <sup>ゆ</sup> <sup>え</sup> <sup>し</sup> <sup>ゆ</sup> <sup>さ</sup> <sup>い</sup> <sup>なん</sup> <sup>ち</sup> <sup>こ</sup> <sup>こ</sup> <sup>そ</sup> <sup>な</sup> <sup>もの</sup> <sup>わ</sup> <sup>れ</sup>  
 乃爾畏るべき神に屈めり、故に主宰よ、爾は此に奠えたる者を、我  
<sup>ら</sup> <sup>し</sup> <sup>ゆう</sup> <sup>じん</sup> <sup>ぜん</sup> <sup>た</sup> <sup>め</sup> <sup>か</sup> <sup>く</sup> <sup>じん</sup> <sup>ひ</sup> <sup>つ</sup> <sup>よう</sup> <sup>おう</sup> <sup>ひ</sup> <sup>と</sup> <sup>し</sup> <sup>わか</sup> <sup>こう</sup> <sup>かい</sup> <sup>もの</sup> <sup>とも</sup>  
 等衆人の善の爲に、各人の必要に應じて等く頌ち、航海する者と偕  
<sup>こう</sup> <sup>かい</sup> <sup>り</sup> <sup>よ</sup> <sup>こう</sup> <sup>もの</sup> <sup>とも</sup> <sup>り</sup> <sup>よ</sup> <sup>こう</sup> <sup>れ</sup> <sup>い</sup> <sup>たい</sup> <sup>い</sup> <sup>し</sup> <sup>や</sup> <sup>まい</sup> <sup>う</sup> <sup>れ</sup> <sup>もの</sup>  
 に航海し、旅行する者と偕に旅行し、靈體の醫師として、病を患うる者  
<sup>い</sup> <sup>や</sup> <sup>たま</sup>  
 を醫し給え、 )

司祭) 爾が獨生子の恩寵と慈憐と仁愛とに因りてなり、爾は彼と至聖至善にして生命  
 を施す爾の神と偕に讃揚せらる、今も何時も世に



司祭) ( 黙誦: <sup>し</sup> <sup>ゆ</sup> <sup>われ</sup> <sup>ら</sup> <sup>か</sup> <sup>み</sup> <sup>なん</sup> <sup>ち</sup> <sup>せい</sup> <sup>す</sup> <sup>ま</sup> <sup>い</sup> <sup>なん</sup> <sup>ち</sup> <sup>く</sup> <sup>に</sup> <sup>こう</sup> <sup>えい</sup> <sup>ほう</sup>  
 座より眷み給え、上には父と偕に坐し、此には見えずして我等と偕に居る者よ、  
<sup>きた</sup> <sup>われ</sup> <sup>ら</sup> <sup>せい</sup> <sup>なん</sup> <sup>ち</sup> <sup>けん</sup> <sup>の</sup> <sup>う</sup> <sup>て</sup> <sup>も</sup> <sup>つ</sup> <sup>なん</sup> <sup>ち</sup> <sup>し</sup> <sup>じ</sup> <sup>ょう</sup> <sup>たい</sup> <sup>し</sup> <sup>そ</sup> <sup>ん</sup> <sup>ち</sup>  
 來りて我等を聖にし、爾の權能の手を以て、爾が至淨の體と至尊の血と  
<sup>われ</sup> <sup>ら</sup> <sup>さ</sup> <sup>づ</sup> <sup>また</sup> <sup>われ</sup> <sup>ら</sup> <sup>も</sup> <sup>つ</sup> <sup>し</sup> <sup>ゆう</sup> <sup>じん</sup> <sup>さ</sup> <sup>づ</sup> <sup>たま</sup>  
 を我等に授け、又我等を以て衆人に授け給え、  
<sup>か</sup> <sup>み</sup> <sup>われ</sup> <sup>ざ</sup> <sup>い</sup> <sup>に</sup> <sup>ん</sup> <sup>き</sup> <sup>よ</sup> <sup>われ</sup> <sup>あ</sup> <sup>われ</sup> <sup>たま</sup> <sup>か</sup> <sup>み</sup> <sup>われ</sup> <sup>ざ</sup> <sup>い</sup> <sup>に</sup> <sup>ん</sup> <sup>き</sup> <sup>よ</sup> <sup>われ</sup> <sup>あ</sup> <sup>われ</sup>  
 神よ我罪人を淨めて、我を憐み給え、神よ我罪人を淨めて、我を憐  
<sup>たま</sup> <sup>か</sup> <sup>み</sup> <sup>われ</sup> <sup>ざ</sup> <sup>い</sup> <sup>に</sup> <sup>ん</sup> <sup>き</sup> <sup>よ</sup> <sup>われ</sup> <sup>あ</sup> <sup>われ</sup> <sup>たま</sup>  
 み給え、神よ我罪人を淨めて、我を憐み給え、 )

司祭) 謹みて聴くべし、聖なる物は聖なる人に、







司祭) ( 黙誦：神の <sup>かみ</sup> 羔 <sup>こひつじ</sup> は <sup>さ</sup> 剖かれ <sup>わか</sup> 分たる、<sup>かれ</sup> 彼は <sup>さ</sup> 剖かれて <sup>ぶんり</sup> 分離せず、<sup>つね</sup> 恒に <sup>くら</sup> 食われて <sup>なが</sup> 永く <sup>つき</sup> 盡き  
ず、<sup>すなわち</sup> 乃 <sup>もの</sup> 領くる <sup>せい</sup> 者を <sup>せい</sup> 聖にす、 )

※信徒領聖まで、聖歌指揮者の指示に随って歌うこと。

( 奉事規程が指定しているのは『主日領聖詞』、すなわち第148聖詠の第一節を繰り返し歌い、間に2節以下をアンティフォン形式で歌う、若しくは誦經する。本来は神品領聖と信徒領聖に区別はないので、同じ領聖詞を使う。日本正教会では通年「大パスハ領聖詞」を歌うことが多い。

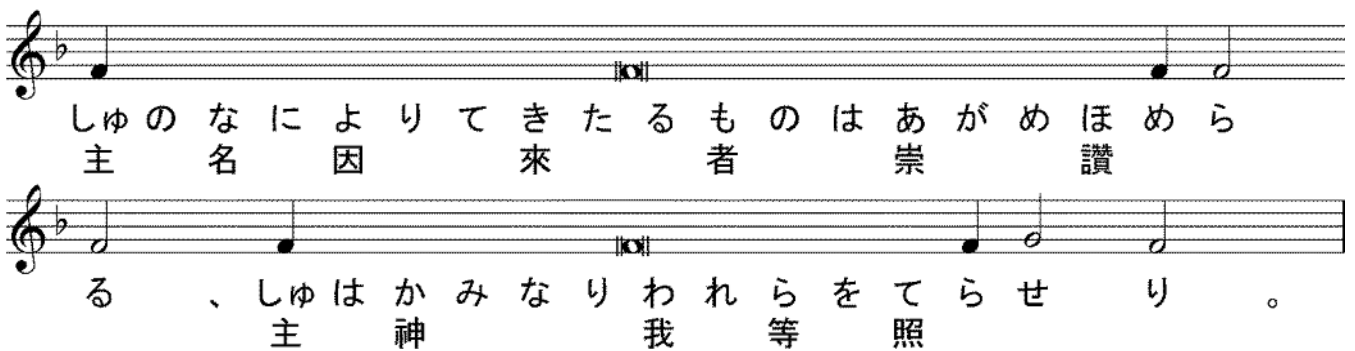
日本正教会では神品領聖時に『主日領聖詞』に代えて、早課イルモス(其の週の調、又は生神女のカタワシヤ等)、スティヒラ等を歌うことが多いが、これに奉事規程上の根拠はない。歌えるものがない場合は、聖詠經を誦經しても良い。 )

【 (大パスハ) 領聖詞 】



【 信徒領聖 】

司祭) <sup>かみ</sup> 神を <sup>おそ</sup> 畏るる <sup>こころ</sup> 心 <sup>しん</sup> と <sup>もつ</sup> 信と <sup>ちか</sup> を <sup>きた</sup> 以て <sup>きた</sup> 近づき <sup>きた</sup> 來れ、



全員) <sup>しゅ</sup> 主よ <sup>われしん</sup> 我 <sup>か</sup> 信 <sup>う</sup> じ、<sup>みと</sup> 且 <sup>なんぢ</sup> つ <sup>じつ</sup> 承 <sup>せい</sup> け <sup>かみ</sup> 認 <sup>こ</sup> め <sup>ざい</sup> て、<sup>にん</sup> 爾 <sup>すく</sup> を <sup>すく</sup> 實 <sup>すく</sup> に <sup>すく</sup> ハ <sup>すく</sup> リ <sup>すく</sup> ス <sup>すく</sup> 生 <sup>すく</sup> 活 <sup>すく</sup> の <sup>すく</sup> 神 <sup>すく</sup> の <sup>すく</sup> 子 <sup>すく</sup>、<sup>すく</sup> 罪 <sup>すく</sup> 人 <sup>すく</sup> を <sup>すく</sup> 救 <sup>すく</sup> う <sup>すく</sup> が

<sup>ため</sup> 爲 <sup>よ</sup> に <sup>きた</sup> 世 <sup>もの</sup> に <sup>しゅう</sup> 來 <sup>ざい</sup> り <sup>にん</sup> し <sup>う</sup> 者 <sup>うち</sup> と <sup>われ</sup> な <sup>だ</sup> す、<sup>い</sup> 衆 <sup>ち</sup> 罪 <sup>また</sup> 人 <sup>しん</sup> の <sup>こ</sup> 中 <sup>すな</sup> 我 <sup>わ</sup> 第 <sup>ち</sup> 一 <sup>なん</sup> な <sup>ぢ</sup> り、<sup>し</sup> 又 <sup>し</sup> 信 <sup>すく</sup> ず、<sup>すく</sup> 此 <sup>すく</sup> れ <sup>すく</sup> は <sup>すく</sup> 乃 <sup>すく</sup> 爾 <sup>すく</sup> が <sup>すく</sup> 至

<sup>じょう</sup> 淨 <sup>たい</sup> の <sup>こ</sup> 體、<sup>すな</sup> 此 <sup>し</sup> れ <sup>そん</sup> は <sup>ち</sup> 乃 <sup>ち</sup> 爾 <sup>ゆえ</sup> が <sup>なん</sup> 至 <sup>い</sup> 尊 <sup>われ</sup> の <sup>あ</sup> 血 <sup>われ</sup> な <sup>わ</sup> り <sup>じゅう</sup> と、<sup>すく</sup> 故 <sup>すく</sup> に <sup>すく</sup> 爾 <sup>すく</sup> に <sup>すく</sup> 祈 <sup>すく</sup> る、<sup>すく</sup> 我 <sup>すく</sup> を <sup>すく</sup> 憐 <sup>すく</sup> み、<sup>すく</sup> 我 <sup>すく</sup> が <sup>すく</sup> 自 <sup>すく</sup> 由

<sup>じゅう</sup> と <sup>すく</sup> 自 <sup>すく</sup> 由 <sup>こと</sup> な <sup>ば</sup> ら <sup>お</sup> ず <sup>こ</sup> して、<sup>すく</sup> 言 <sup>すく</sup> と <sup>すく</sup> 行 <sup>すく</sup> に <sup>すく</sup> て、<sup>すく</sup> 知 <sup>すく</sup> る <sup>すく</sup> と <sup>すく</sup> 知 <sup>すく</sup> ら <sup>すく</sup> ず <sup>すく</sup> して、<sup>すく</sup> 犯 <sup>すく</sup> し <sup>すく</sup> し <sup>すく</sup> 諸 <sup>すく</sup> 罪 <sup>すく</sup> を <sup>すく</sup> 赦 <sup>すく</sup> し <sup>すく</sup> 給 <sup>すく</sup> え、<sup>すく</sup> 並

われ ていざい なんぢ しじょう きみつ う つみ ゆるし えいせい え いた  
に我に定罪なく、爾が至淨なる機密を領けて、罪の赦しと永生とを得るを致させ

たま  
給え、アミン。

かみ こ いまわれ なんぢ きみつ えん あづか もの い たま けだしわれなんぢ あだ き  
神の子よ、今我を爾が機密の筈に與る者として容れ給え、蓋我爾の仇に機

みつ つ なんぢ ごと せつぶん な すなわちうとう ごと なんぢ う  
密を告げざらん、また爾にイウダの如き接吻を爲さざらん、乃右盜の如く爾を承

みと い しゅ なんぢ くに おい われ きおく しゅ いの なんぢ せい きみつ  
け認めて曰う、主よ、爾の國に於て我を記憶せよと、主よ、祈る爾の聖なる機密を

う わ ため しんあんあるい ていざい れいたい いやし  
領くるは、我が爲に審案或は定罪とならず、すなわち靈體の醫とならんことを、

【 (大パスハ) 領聖詞 】

※ 全員が領聖し畢り、元の位置に戻るまで繰り返す。

ハリストスの せ いた い を う け 、 ふ し い の い づ み  
聖 體 領 不 死 泉  
を の め よ 、  
飲

司祭) ( 黙誦 : ハリストスの復活を見て、聖なる主イイスス・獨罪なき者を拜むべし、ハ

リストスよ、我等爾の十字架を拜み、爾の聖なる復活を歌い讃む、爾

は我等の神なればなり、爾の外他の神を知らず、唯爾の名を稱う、信者よ、

みなきた せい ふくかつ おが じゅうじか よろこび ぜんせかい  
皆來りてハリストスの聖なる復活を拜むべし、十字架にて喜は全世界に

のぞ われらつね しゅ ほ あ そのふくかつ あが うた しゅ じゅうじか  
臨めばなり、我等恒に主を讃め揚げて、其復活を崇め歌わん、主は十字架

に釘うたるるを忍びて、死を以て死を亡ししによる、

あらた ひか ひか しゅ こうえいなんぢ かがや  
新なるイエルサリムよ、光り光れよ、主の光榮爾に輝けばなり、シオン

よ、今祝いて樂めよ、爾も潔き生神女よ、爾が生みし主の復活を

よろこ たま  
歡び給え、

ああおい しせい ああちえ かみ ことば ちから なんぢ  
嗚呼大にして至聖なるパスハ・ハリストスよ、嗚呼智慧と神の言と能力よ、爾

くに く ひ おい われら なおしたし なんぢ う たま  
が國の暮れざる日に於て、我等に猶親く爾を領けさせ給え

しゅ なんぢ しそん ち もつ なんぢ しょせいじん きとう よ ここ きおく  
主よ、爾が至尊の血を以て、爾が諸聖人の祈禱に因りて、此に記憶せら

もの しょざい あら たま  
れし者の諸罪を滌い給え、

ひと あい しゅさい わ たましい おんしゅ われら こ ひ おい なんぢ てん  
人を愛する主宰、我が 靈 の恩主よ、我等に、此の日に於ても、 爾 が天  
じょう ふし きみつ う たま なんぢ かんしゃ われら みち なお われら  
上の不死の機密を領けさせ給いしを 爾 に感謝す、我等の途を直くし、我等  
しゅうじん なんぢ おそ おそ けんご われら いのち まも われら あゆみ かた  
衆人を 爾 を畏るるの畏れに堅固にし、我等の生命を護り、我等の歩 を固  
たま こうえい しょうしんぢょ えいていどうぢょ およ なんぢ しょせいじん いのり  
め給え、光榮なる 生 神女・永貞童女マリヤ及び 爾 が諸聖人の祈 と  
ねがい よ  
願 とに因りてなり、 )

※ 全員が元の位置に戻って歌う準備ができてから「アリルイヤ」を歌う。

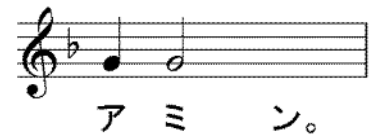
Ari-ru-ya, Ari-ru-ya

司祭) かみ なんぢ たみ すく およ なんぢ しぎょう ふく くだ  
神よ、 爾 の民を救い、及び 爾 の嗣業 に福を降せ、

われらすでにまことのひかりをみ観、てんの  
我等已 眞 光 観 天  
せいしんをうけ、ただしきしんをえて、  
聖 神 受 正 信 得  
わかれざるせいさんしゃをおがむ、かれわれ  
分 聖 三者 拜 彼 我  
らをすくいたまえばなあり。  
等 救 給

司祭) ( 黙誦: かみ ねがわ なんぢ しょうてん うえ あ なんぢ こうえい ぜんち おお われ  
等の神は恒に崇め讃めらる、 )

司祭) <sup>いま いつ よよ</sup> 今も何時も世に、



しゅよ、ねがわくはわがくちはさんびにみてら  
主 願 我 口 讚 美 満  
れ て、われらなんぢのこうえいをうた  
我 等 爾 光 榮 歌  
わ ん。なんぢわれらに、しんせいにしてふし  
爾 我 等 神 聖 不 死  
なるいのちをほどこすなんぢのせいきみ  
生 命 施 爾 聖 機 密  
つをうくるをゆるせばなり。いのるわ  
領 許 祈 我  
れらをなんぢのせいせいにまもり、しゅうじ  
等 爾 成 聖 護 終 日  
つなんぢのぎをならわしめたまえアリ  
爾 義 習 給  
ルイヤ、アイルイヤ、アイルイヤ。

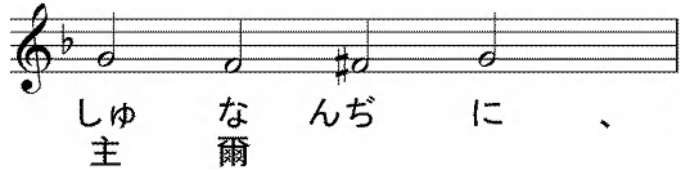
司祭) <sup>つつし た しんせい しじょう ふし いのち ほどこ てんじょう おそ せい</sup> 謹みて立て、神聖・至淨・不死にして生命を施す天上の畏るべきハリストスの聖  
<sup>きみつ う よろ しゅ かんしゃ</sup> 機密を領けて、宜しく主に感謝すべし、

しゅあわれめよ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐

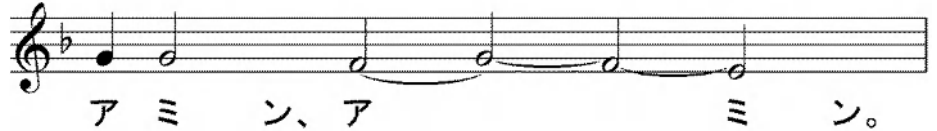
司祭) <sup>かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも</sup> 神よ、爾の恩寵を以て我等を助け救い憐み護れよ、

司祭) <sup>こ ひ じゅんぜん せいせい へいあん むざい もと われらおのれ みおよ たい</sup> 此の日の純全・成聖・平安・無罪ならんことを求めて、我等己の身及び互に

<sup>おのおの み もつ ならび ことごと われら いのち もつ かみ いたく</sup> 各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭) <sup>けだしなんぢ われら せいせい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ</sup> 蓋爾は我等の成聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世世に、



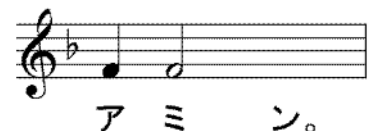
司祭) <sup>へいあん い</sup> 平安にして出づべし、



司祭) <sup>しゅ いの</sup> 主に禱らん、



司祭) <sup>なんぢ さんよう もの ふく くだ およ なんぢ たの もの せい しゅ なんぢ たみ すく</sup> 爾を讚揚する者に福を降し、及び爾を恃む者を聖にする主よ、爾の民を救  
<sup>およ なんぢ しぎょう ふく くだ なんぢ きょうかい じゅうまん まも なんぢ どう び</sup> い、及び爾の嗣業に福を降し、爾が教會の充滿を守り、爾が堂の美なるを  
<sup>あい もの せい なんぢ しんせい ちから もつ かれら こうえい およ われらなんぢ たの</sup> 愛する者を聖にせよ、爾が神聖の力を以て彼等を光榮し、及び我等爾を恃む  
<sup>もの のこ なか なんぢ せかい なんぢ しよきょうかい しよしさい わく に てんのうおよ くに</sup> 者を遣す勿れ、爾の世界と爾の諸教會と諸司祭と、我が國の天皇及び國を  
<sup>つかさど ものおよ なんぢ しゅうじん へいあん たま けだしおよそ ぜん ほどこし およそ ぜんび</sup> 司る者及び爾の衆人に平安を賜え、蓋凡の善なる施、凡の全備なる  
<sup>たまもの うえ なんぢこうめい ちち くだ われらこうえい かんしゃ ふくはい なんぢちち</sup> 賜は、上より、爾光明の父より降るなり、我等光榮・感謝・伏拜を爾父と  
<sup>こ せいしん けん いま いつ よよ</sup> 子と聖神に獻ず、今も何時も世世に、



ねがわくはしゅのなはあがめほめられていまよ  
願主名崇讃今

りよよにいたらん。ねがわくはしゅのなはあが  
世世至願主名崇

めほめられていまよりよよにいたらん。ねが  
讃今世世至願

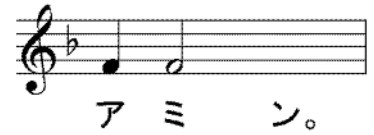
わくはしゅのなはあがめほめられていまよりよ  
主名崇讃今世

よにいたらん。  
世至

誦經) 我何れの時にも主を讃め揚げん、彼を讃むるは恒に我が口に在り、我が靈は主  
 を以て誇らん、溫柔なる者は聞きて樂しまん。我と偕に主を尊め、偕に彼の名を崇  
 め讃めん。我嘗て主を尋ねしに、彼は我に聆き納れて、我が都ての危きより我を免  
 れしめ給えり。目を擧げて彼を仰ぐ者は照されたり、彼等の面は愧を受けざらん。此の  
 貧しき者呼びしに、主は聆き納れて、之を其悉くの艱難より救えり。主の使は主  
 を畏るる者を環り衛りて、彼等を援く。味えよ、主の如何に仁慈なるを見ん、彼を恃  
 む人は福なり。凡そ主の聖人よ、主を畏れよ、蓋彼を畏るる者は乏しきことな  
 し。少き獅子は乏しくして餓え、唯主を尋ぬる者は何の幸福にも缺くるなし。

司祭) ( 黙誦：親ら法律と諸預言者との成満にして、父の定制を悉く成満せ  
 しハリストス我が神よ、常に我等の心を喜と樂とに成満せしめ給え、  
 今も何時も世々に、 )

司祭) 願くは主の降福は、其恩寵と仁愛とに因りて常に爾等に在らん、今も何時も  
 世々に、



※ もし永眠者記憶を続けて行う場合はP33【 <sup>リテイヤ</sup>永眠者の爲の熱衷祈祷】に飛ぶ。

【 通常の終結 】

司祭) ハリストス神我等の <sup>かみわれら たのみ</sup> 恃よ、<sup>こうえい なんぢ き</sup> 光榮は爾に歸す、<sup>こうえい なんぢ き</sup> 光榮は爾に歸す、

こう え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も  
光 榮 父 子 聖 神 歸 今

い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。 し ゅ あ わ れ め 、 し ゅ  
何 時 世 世 主 憐 主

あ わ れ め 、 し ゅ あ わ れ め よ 、 ふ く を く だ  
憐 主 憐 福 降

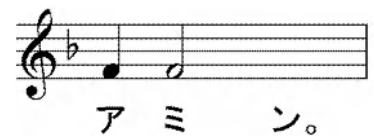
せ 。

司祭) 死より復 <sup>し ふくかつ</sup> 活せしハリストス我等の <sup>われら まこと かみ</sup> 眞の神は、<sup>そのしじょう はは こうえい</sup> 其至浄なる母、<sup>さんび</sup> 光榮にして讚美たる

<sup>せいしと われら せいしんぶ</sup> 聖使徒、我等の聖神父<sup>だいしゅきょうせいきんこう</sup>コンスタンチノーポリスの大主教聖金口イオアン、

<sup>こくしょうほうしん わがしよしんぶ</sup> 克肖捧神なる我諸神父、<sup>およ しよせいじん きとう より われら あわれ たま</sup> (某)及び諸聖人の祈禱に因て我等を憐み給わん。

<sup>ぜん</sup> 善にして人<sup>ひと あい</sup>を愛する主<sup>しゅ</sup>なればなり、



【 萬壽詞 】

か み よ 、 わ が く に の て ん の お う 、 お よ び  
神 我 國 天 皇 及

く に を つ か さ ど る も の 、 わ れ ら の ふ し ゆ  
 國 司 者 我 等 府 主  
 き ょ う セ ラ フィ ム 、 お よ び こ と ご と く の せ い き ょ う  
 教 及 悉 正 教  
 の ハ リ ス テ ィ ア ニ ン ら を 、 い く と せ に も ま も り  
 等 幾 歳 護  
 た ま え 。  
 給

( 祈祷終了、十字架接吻 )



【 永眠者の爲の熱衷祈禱 <sup>リテイヤ</sup> 】

ひとをあいするきゆうせいしゅよ、しせしぎ  
 人 愛 救 世 主 死 義

じんのたましいとともに、なんぢがぼくひの  
 人 霊 借 爾 僕 婢

たましいをやすんぜしめて、かれらを  
 霊 安 彼 等

なんぢにあるふくらくのいのちに、まもり  
 爾 在 福 樂 生 命 護

たまあえ。しゅよなんぢがしよせいじんのあん  
 給 主 爾 諸 聖 人 安

そくするところに、なんぢがぼくひのたま  
 息 處 爾 僕 婢 霊

しいをやすんぜしめたまあえ。なんぢひとりひ  
 安 給 爾 獨 人

とをあいするしゅなればなあり。

こうえいはちちとことせいしんにきす、  
 光 榮 父 子 聖 神 歸

なんぢはぢごくにくだりてつながれしもの  
 爾 地 獄 降 繋 者

くさりをときたるかみなり。みづから  
 鎖 釈 神 親

なんぢがぼくひのたましいをやすんぜしめ  
爾 僕 婢 靈 安

た ま あ え 。  
給

い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。  
今 何 時 世 世

ひ と り い さ ぎ よ く き ず な き ど う て い ぢ よ 、 た ね  
獨 潔 瑕 童 貞 女 種

な く し て か み を う み し も の よ 、 か れ ら の  
神 生 者 彼 等

た ま し い の す く わ れ ん こ と を い の り た ま あ  
靈 救 祈 り 給

え 。

【 重聯禱 】

司祭) <sup>かみ なんぢ おおい あわれみ より われら あわれ なんぢ いの き い あわれ</sup> 神よ、爾の大なる憐に因て我等を憐めよ、爾に禱る、聆き納れて憐めよ、

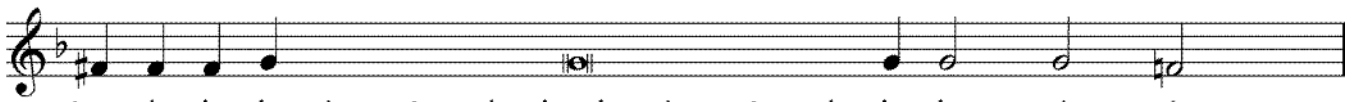
しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) <sup>またねむ かみ ぼくひ たましい あんそく ため およ かれら およ じゆう じゆう</sup> 又寝りし神の僕婢(某)の靈の安息の爲、及び彼等に凡そ自由と自由ならざ

<sup>つみ ゆる ため いの</sup> る罪の赦されんが爲に禱る、

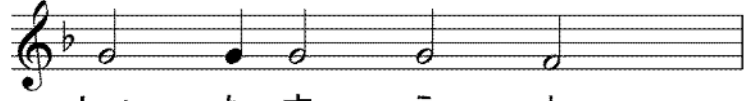
しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) <sup>しゅかみ かれら たましい しよぎじん あんそく ところ い たま いの</sup> 主神が彼等の靈を諸義人の安息する處に入れ給わんことを禱る、



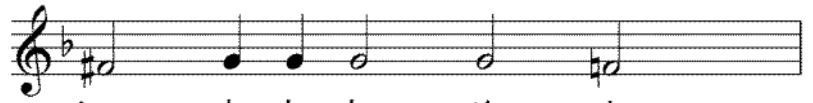
しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
 主 憐 主 憐 主 憐

司祭) <sup>かれら</sup> <sup>かみ</sup> <sup>あわれみ</sup> <sup>てんごく</sup> <sup>しょざい</sup> <sup>ゆるし</sup> <sup>たま</sup> <sup>わがし</sup> <sup>おうおよ</sup>  
 彼等に神の憐と天國と諸罪の赦とを賜わんことを、ハリストス我死せざる王及  
<sup>かみ</sup> <sup>ねが</sup>  
 び神に願う、



しゅ たま え よ。  
 主 賜

司祭) <sup>しゅ</sup> <sup>いの</sup>  
 主に禱らん、



しゅ あわれめよ。  
 主 憐

司祭) <sup>もろもろ</sup> <sup>れいしん</sup> <sup>もろもろ</sup> <sup>にくたい</sup> <sup>かみ</sup> <sup>し</sup> <sup>ほろ</sup> <sup>あくま</sup> <sup>むなし</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>せかい</sup> <sup>いのち</sup>  
 諸の靈神と諸の肉體との神、死を亡ぼし悪魔を虚くし、爾の世界に生命  
<sup>たま</sup> <sup>しゅ</sup> <sup>なんぢみづか</sup> <sup>ねむ</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>ぼくひ</sup> <sup>たましい</sup> <sup>ひか</sup> <sup>ところ</sup> <sup>しげ</sup> <sup>くさば</sup>  
 を賜いし主よ、爾親ら寝りし爾の僕婢(某)の靈を光る處、茂き草場、  
<sup>へいあん</sup> <sup>ところ</sup> <sup>やまい</sup> <sup>かなしみ</sup> <sup>なげき</sup> <sup>とお</sup> <sup>ところ</sup> <sup>あんそく</sup> <sup>ぜん</sup> <sup>ひと</sup> <sup>あい</sup>  
 平安の處、病と悲と歎との遠ざかる處に安息せしめ、善にして人を愛する  
<sup>かみ</sup> <sup>より</sup> <sup>かれら</sup> <sup>あるい</sup> <sup>ことば</sup> <sup>あるい</sup> <sup>おこない</sup> <sup>あるい</sup> <sup>おもい</sup> <sup>おか</sup> <sup>ことごと</sup> <sup>つみ</sup> <sup>ゆる</sup>  
 神なるに因て彼等が或は言、或は行、或は思にて犯しし悉くの罪を赦  
<sup>たま</sup> <sup>けだし</sup> <sup>ひとひとり</sup> <sup>い</sup> <sup>つみ</sup> <sup>おこな</sup> <sup>もの</sup> <sup>ただなんぢ</sup> <sup>つみ</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>ぎ</sup> <sup>えいえん</sup>  
 し給え。蓋人一も生きて罪を行わざる者なし、唯爾は罪なし、爾の義は永遠  
<sup>ぎ</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>ことば</sup> <sup>しんじつ</sup> <sup>けだし</sup> <sup>われら</sup> <sup>かみ</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>ねむ</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>ぼくひ</sup>  
 の義、爾の言は眞實なり。蓋ハリストス我等の神よ、爾は寝りし爾の僕婢  
<sup>ふくかつ</sup> <sup>いのち</sup> <sup>あんそく</sup> <sup>われら</sup> <sup>こうえい</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>むげん</sup> <sup>ちち</sup> <sup>しせいしぜん</sup>  
 (某)の復活と生命と安息なり。我等光榮を爾と爾の無原の父と至聖至善にし  
<sup>いのち</sup> <sup>ほどこ</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>しん</sup> <sup>けん</sup> <sup>いま</sup> <sup>いつ</sup> <sup>よよ</sup>  
 て生命を施す爾の神とに獻ず、今も何時も世に、



ア ミ ン。

【 永眠者の爲のコンダク 】



ハリストスよ、なんぢがぼくひのたましい  
 爾 僕 婢 靈



を、しよせいじんとともに、やまい  
 諸 聖 人 借 疾

も かな し み も な げ え き も な く 、 お わ  
 悲 歎 終  
 り な き い の ち の ある と こ ろ に や す ン ぜ  
 生 命 處 安  
 し い め た ま あ え 。  
 給

【 終 結 】

司祭) <sup>かみわれら たのみ</sup> ハリストス神我等の <sup>こうえい なんぢ き</sup> 恃よ、<sup>こうえい なんぢ き</sup> 光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す、

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も  
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今  
 い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。 し ゅ あ わ れ め 、 し ゅ  
 何 時 世 世 主 憐 主  
 あ わ れ め 、 し ゅ あ わ れ め よ 、 ふ く を く だ  
 憐 主 憐 福 降  
 せ 。

司祭) <sup>し ふくかつ い もの し もの そのぜんのう て たも たま</sup> 死より復活し、生ける者と死せし者を其全能の手に保ち給うハリストス我等の <sup>われら まこと</sup> 眞の  
<sup>かみ そのしじょう はは こうえい さんび せいしと こくしょうほうしん わがしよしんぶ</sup> 神は、其至浄なる母、光榮にして讚美たる聖使徒、克肖捧神なる我諸神父、  
 ( 某 ) <sup>およ しよせいじん きとう より ねむ ぼくひ たましい しよぎじん すまい い</sup> 及び諸聖人の祈禱に因て、寝りし僕婢(某)の靈を諸義人の住所に入れ、  
<sup>ふところ やす しよぎじん れつ くわ およ われら あわれ たま ぜん</sup> アブラアムの懐に安んぜしめ、諸義人の列に加え、及び我等を憐み給わん。善に  
<sup>ひと あい しゅ</sup> して人を愛する主なればなり、

ア ミ ン 。

司祭 <sup>しゅ なんぢ ぼくひ</sup> 主よ、爾の僕婢( 某 )の <sup>さいわい</sup> 福 <sup>ねむり</sup> なる <sup>えいえん</sup> 寢 <sup>あんそく</sup> に永遠の安息を <sup>あた</sup> 與え、<sup>かれら</sup> 彼等に <sup>えいえん</sup> 永遠の <sup>きおく</sup> 記憶

<sup>な たま</sup>  
を爲し給え、

え い え んの き お  
永 い 遠 んの き お  
く 、 え い え んの き  
お 憶 く 、 え い え ん  
の き お 憶  
の き お 憶

【 萬壽詞 】

か み よ 、 わ が く に の て ん の お う 、 お よ び  
神 我 國 天 皇 及  
く に を つ か さ ど る も の 、 わ れ ら の ふ し ゆ  
國 司 者 我 等 府 主  
き ょ う セ ラ フ ィ ム 、 お よ び こ と ご と く の せ い き ょ う  
教 及 悉 正 教  
の ハ リ ス テ ィ ア ニ ン ら を 、 い く と せ に も ま も り  
等 幾 歳 も 護  
た ま え 。

( 祈禱終了、十字架接吻 )

【 領 聖 感 謝 祝 文 】

かみ こうえい なんぢ き かみ こうえい なんぢ き かみ こうえい なんぢ き  
神や光 榮は 爾 に歸す、神や光 榮は 爾 に歸す、神や光 榮は 爾 に歸す、

【 第一祝文 】 しゅわ かみ なんぢわれざいにん す なおなんぢ せい きみつ あづか  
主我が神や、 爾 我 罪 人を棄てずして、 尚 爾 の 聖なる機密に 與

もの いた たま なんぢ かんしゃ われた もの なんぢ しじょう てん たまもの う  
者と致させ給うを 爾 に感謝す、我堪えざる者に 爾 が至 淨 なる天の 賜 を受く

ゆる たま なんぢ かんしゃ しゅさい ひと あい しゅ われら ため し ふくかつ  
るを容し給うを 爾 に感謝す、主 宰・人を愛する主、我等の爲に死して復 活し、

われ たましい からだ おん あた これ せい ため われら こ おそ べ いのち  
我が 靈 と 體 とに恩を與え、之を聖にするが爲に、我等に此の恐る可くして生命を

ほどこ きみつ たま もの もと こ きみつ われ たましい からだ いや およそ てき  
施す機密を賜いし者や、求む此の機密は、我にも 靈 と 體 とを癒し、凡の敵

がい か われ ころ め あきら われ たましい ちから へいあん はぢ え しん  
の害を驅り、我が 心 の目を明かにし、我が 靈 の力を平安にし、耻を得ざる信

いつわり あい えいち み なんぢ いましめ まも なんぢ しんせい おんちょう  
とし、偽 なき愛とし、睿智を充たし、爾 の 誠 を守らしめ、爾 が神聖の恩 寵

ま なんぢ くに つ もの え たま われ か ごと こ きみつ  
を益し、 爾 の國を嗣がしむる者となるを得せしめ給え、我は此くの如く、是の機密に

なんぢ せいせい まも つね なんぢ おんちょう おも またおの ため せいかつ すなわち  
て 爾 の成 聖に護られ、常に 爾 の恩 寵 を思い、復己が爲に生活せず、 乃

なんぢわ しゅさいおよ おんしゅ ため せいかつ もつ えいせい のぞみ いた こ よ はな  
爾 我が主 宰 及び恩 主の爲に生活し、以て永生の 望 を懐き、此の世を離れて、

えいえん いこい か しゅく もの た こえ およ なんぢ かんばせ い つく びぜん み  
永遠の 息、彼の 祝 する者の絶えざる聲、及び 爾 が 顔 の言い盡されぬ美善を見

もの かぎ たのしみ ところ いた けだし わ かみ なんぢ なんぢ あい  
る者の限りなき 樂 の處に至らん、蓋 ハリストス我が神や、 爾 は 爾 を愛する

もの まこと のぞみ い つく たのしみ およ ぞう う もの なんぢ よよ ほ うた  
者の 眞 の 望 と言い盡されぬ 樂 なり、凡そ造を受けし者は 爾 を世世に讃め歌う、

「アミン」

【第二祝文 聖大ワシリイの原文】 しゅさい かみ ばんせい おう ばんぶつ ぞうせいしゃ  
主 宰ハリストス神、萬世の王、萬物の造成者や、

およ われ たま ところ しょぜん かついのち ほどこ しじょう なんぢ きみつ う たま  
凡そ我に賜いし 所 の諸善、且生命を 施す至 淨 なる 爾 の機密を領けさせ給い

なんぢ かんしゃ またなんぢ いの ぜん ひと あい しゅ われ なんぢ おおい した  
しを 爾 に感謝す、又 爾 に祈る、善にして人を愛する主や、我を 爾 が 庇 の下

なんぢ つばさ かげ まも われ いき た いた まで いさぎよ りょうしん もつ  
に、 爾 が 翼 の蔭に護り、我に呼吸の絶えんとするに至る迄、 潔 き良 心を以て、

どうぜん なんぢ せいたいせいけつ う もつ つみ ゆるし えいせい う いた たま けだし  
當然に 爾 の聖 體 聖 血を領け、以て罪の 赦 と永生とを得るを致させ給え、 蓋

なんぢ いのち かけて せいせい いづみ しょぜん たま しゅ われらなんぢ ちち せいしん こうえい  
爾 は生命の糧、成 聖の 泉、諸善を賜う主なり、我等 爾 と父と聖 神とに光 榮

けん いま いつ よよ  
を獻ず、今も何時も世世に、「アミン」

【 第三祝文 聖シメオン「メタフラスト」の原詩 】 わ ぞうせいしゅ あまん おのれ み かけて  
我が造成主、甘じて己の身を糧と

われ あた ひ ふとうしゃ や もの もと われ や なか すなわちわ ひやくたいしよせつしん  
して我に與え、火にして不當者を焚く者や、求む我を焚く母れ、乃吾が百體諸節心

ぷく い わ しょざい いばら や たましい きよ おもい せい すじ ほね かた ごかん  
腹に入り、吾が諸罪の棘を焚き、靈を淨め、思を聖にし、筋と骨とを固め、五官を

あきら わ ぜんしん なんぢ おそ おそれ くぎ つね われ おお われ たも われ たましい  
明かにし、吾が全身を、爾を畏るる畏に釘うち、常に我を庇い、我を保ち、我を靈

がい もろもろ おこない ことば まも われ きよ われ あら われ かざ われ おき われ  
を害する諸の行と言とより護り、我を淨め、我を滌い、我を飾り、我を治め、我

ひら われ てら わ またつみ すまい ひとりなんぢ せいしん すまい あらわ およそ  
を啓き、我を照し、我が復罪の住所たらずして、獨爾が聖神の住所たるを顯し、凡

あくしゃおよそ よく われせいたい い よ なんぢ いえ もの に ひ に  
の悪者凡の慾は、我聖體の入るに依りて爾の家となりし者より逃ぐるること、火より逃ぐ

ごと たま われそのてんたつしゃ もろもろ せいじゃ しょひん しんし なんぢ ぜんく  
るが如くならしめ給え、我其轉達者として、諸の聖者、諸品の神使、爾の前驅、

ちえ した およ なんぢ むてんしじょう はは なんぢ すす じれん しゅわ かれら  
智慧なる使徒、及び爾が無玷至淨の母を爾に進む、慈憐の主我がハリストスや、彼等の

きとう い なんぢ えきしゃ ひかり こ たま けだしひとりしぜん しゅ なんぢ われら たましい  
祈禱を容れて、爾の役者を光の子となし給え、蓋獨至善の主や、爾は我等の靈

せいせい こうみょう われらみなかみ しゅさい よろ ところ ごと ひび こうえい なんぢ けん  
の成聖と光明なり、我等皆神と主宰に宜しき所の如く、日に光榮を爾に獻ず、

【 第四祝文 】 しゅ われら かみ ねがは なんぢ せいたい わ ため  
主イイスハリストス我等の神や、願くは爾の聖體は、我が爲に

えいせい なんぢ そんけつ つみ ゆるし ねがわ こ かんしゃ まつり わ ため きえつ  
永生となり、爾の尊血は、罪の赦とならん、願くは此の感謝の祭は、我が爲に喜悦

そうけん あんらく またおそ べ なんぢ さいど こうりん とき われざいにん なんぢ こうえい  
と壯健と安樂とならん、又畏る可き爾が再度の降臨の時、我罪人に、爾が光榮の

みぎ た え たま なんぢ しじょう はは しょせいじん きとう よ  
右に立つを得せしめ給え、爾が至淨の母と諸聖人との祈禱に依りてなり、

【 第五祝文 至聖生神女に捧ぐ 】 しせい ちょさい しょうしんぢよ わ くら たましい  
至聖なる女宰・生神女、我が味みたる靈の

ひかり わ たのみ おおい かくれが なぐさめ よろこび なんぢ われた もの なんぢ こ しじょう  
光、吾が憑特と悒悒と避所と慰藉と歡喜や、爾が我堪えざる者に、爾の子の至淨の

たいしそん ち う もの え たま なんぢ かんしゃ なおいの まこと ひかり う  
體至尊の血を領くる者となるを得せしめ給いしを爾に感謝す、猶祈る、眞の光を生み

もの わ ころろ れいもく あきらか ふし いづみ う もの われつみ ころ もの い  
し者や、吾が心の靈目を明にせよ、不死の泉を生みし者や、我罪に殺されたる者を生

たま じれん かみ じあい はは われ あわれ わ ころろ しょうかん ひつう わ おもい  
かし給え、慈憐なる神の慈愛の母や、我を憐み、吾が心に傷感と悲痛、吾が思に

けんそん わ とりこ いねん よびかへし たま われ いき た えん とするに 至るまで、罪を獲

ずして、至淨なる機密の成聖を受けて、靈と體との醫を得るを致し、並に我に

つうかい うけとめ なみだ あた しょうがいなんぢ かしょうさんえい たま けだしなんぢ よよ さん  
痛悔と承認との涙を與えて、生涯爾を歌頌讚榮せしめ給え、蓋爾は世世に讚

び こうえい み こうむ  
美と光榮とを満ち被る、「アミン」

2024年 6月14日 一部改訂